

青森県埋蔵文化財調査報告書 第408集

# 向田(37)遺跡

—一般国道279号道路改築事業(有戸北バイパス)に伴う遺跡発掘調査報告—

2006年3月

青森県教育委員会



# 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、野辺地町教育委員会の協力を得て、平成16年度に一般国道279号道路改築事業（有戸北バイパス）予定地内に所在する向田<sup>37</sup>遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、溝跡、柱穴状ピットなどの遺構や、同時代の土師器、須恵器、製塩土器、土製品、鉄製品などの遺物が発見され、本遺跡が平安時代の集落跡であることが分かりました。

陸奥湾の南東岸に延びる野辺地町には、数多くの埋蔵文化財包蔵地が遺されていますが、その中には、平安時代の集落跡として学術的に重要な遺跡が少なからず含まれています。

近年、有戸北バイパスの建設事業に先立って実施された、野辺地バイパス・有戸バイパス建設事業に伴う発掘調査等によって、この地域の平安時代の社会の様子が次第に明らかになってきました。

本報告書は、平成16年度向田<sup>37</sup>遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものですが、この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域社会の歴史教育等に利用されることを期待します。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部高規格道路・津軽ダム対策課並びに野辺地町教育委員会と、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 白 鳥 隆 昭

## 例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが実施した一般国道279号道路改築事業（有戸北バイパス）に伴う野辺地町向田<sup>37</sup>遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 向田<sup>37</sup>遺跡の所在地は、青森県上北郡野辺地町字向田379外、青森県遺跡番号は、40139である。
- 3 調査期間は、以下のとおりである。  
発掘作業期間 平成16年6月1日～8月12日  
整理作業期間 平成17年4月1日～3月31日
- 4 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター工藤総括主幹が担当したが、依頼原稿については、執筆者名を文頭に記した。
- 5 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部高規格道路・津軽ダム対策課が負担した。
- 6 資料の鑑定や同定・保存処理については、次のとおり委託した（敬称略）。  
石器の石質鑑定 青森県立浪岡高等学校教諭 山口義伸  
炭化材の樹種同定 (株) パレオ・ラボ  
炭化種実の同定 (株) パレオ・ラボ  
鉄製品の保存処理 (株) J F E テクノリサーチ
- 7 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、野辺地町発行の2万5千分の1地形図（野辺地町管内図）及び2千5百分の1地形図（野辺地都市計画図）を複写して使用した。
- 8 挿図に付した北の方位は、すべて座標北である。
- 9 堆積土層等の色調観察には、新版標準土色帖（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。
- 10 挿図の土層断面図等には、“-”の横に標高を付した。
- 11 発掘調査時に使用した遺構の略号は、次のとおりであるが、整理作業中に変更したものもある。  
S I- 竪穴住居跡 S X- 竪穴遺構 S K- 土坑 S V- 溝状土坑 S D- 溝跡
- 12 遺構実測図は、原則として縮尺1/25（竪穴住居跡カマド等）、1/50（竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・溝状土坑等）、1/100（溝跡・柱穴状ピット群等）で掲載し、各図版ごとにスケール等を示した。
- 13 遺構実測図に使用した表現・表示等の指示内容は、次のとおりである。

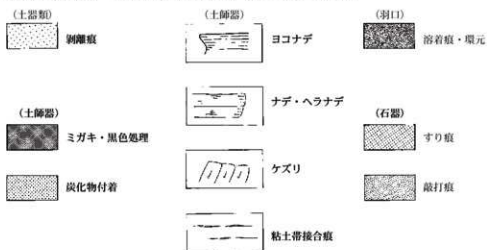


焼土・被熱痕

- 14 遺物実測図は、原則として縮尺2/5（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器）、1/3（土製品・礫石器・木製品）、2/3（剥片石器・鉄製品）で掲載し、各図版ごとにスケール等を示した。



15 遺物実測図に使用した表現・表示等の指示内容は、次のとおりである。



16 遺物実測図には、出土区・出土層、計測値等を付した。出土区は簡略に表記し（例 第1号竪穴住居跡→1号住居跡 P-8グリッド→P-8）、出土層が堆積土の場合、当該遺構以外の出土層は省略した（例 土坑1堆積土→土坑1）。また、土製品、石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ（cm）・重さ（g）の順に表記したが、（ ）内の数値は推定値である。

17 遺物写真は、原則として縮尺1/6～1/4（土師器・須恵器）、縮尺1/4（縄文土器・弥生土器・製塩土器）、1/4（土製品・木製品・礫石器）、1/2（剥片石器・鉄製品）で掲載した。

18 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した（例 図50-2→50-2）。

19 文中で引用した文献については、著者名、刊行年度、書名等を各文末に記した。

20 発掘調査及び報告書作成における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

21 発掘調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。

野辺地町教育委員会、瀬川 滋、藤谷麻美、藤原弘明、東北測量株式会社 能登谷宣康 山岸英夫

# 目次

序

例言

目次

## 第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 発掘作業の方法と経過	3
第4節 整理作業の方法と経過	6

## 第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡周辺の地形及び地質	7
第2節 周辺の遺跡	12

## 第3章 調査の成果

第1節 検出遺構と出土遺物	16
1 竪穴住居跡	16
2 竪穴遺構	50
3 土坑	53
4 溝状土坑	60
5 溝跡	61
6 柱穴状ピット群	62
7 焼土	62
第2節 遺構外出土遺物	63
1 土師器	63
2 須恵器	64
3 製塩土器	64
4 縄文・弥生土器	64
5 土製品	64
6 石器	64
7 鉄製品・鉄滓	64

## 第4章 総括

第1節 検出遺構	70
第2節 出土遺物	71

## 付章 理化学的分析

第1節 炭化材の樹種同定	73
第2節 炭化種実の同定	81
写真図版	85
報告書抄録	98

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経過

青森県県土整備部高規格道路・津軽ダム対策課が進めている下北半島縦貫道路建設事業は、むつ市から上北郡天間林村（現 七戸町）までの総延長約60kmの自動車専用地域高規格道路として計画されているが、この建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、当面の整備区間である野辺地バイパス関連の調査が平成9～14年度、有戸バイパス関連の調査が平成10～14年度で終了する見通しになったので、引き続き有戸北バイパス関連の埋蔵文化財調査について、高規格道路・津軽ダム対策課と野辺地町教育委員会、青森県教育庁文化財保護課の3者による協議が開始された。

そこで平成14年11月に、高規格道路・津軽ダム対策課、十和田県土整備事務所高規格道路建設課、野辺地町教育委員会、文化財保護課が有戸北バイパス建設予定地の現地踏査（分布調査）を行って、調査対象区域を協議・確定し、平成15年度から、野辺地・有戸バイパス関連の埋蔵文化財調査と同様に、青森県教育委員会と野辺地町教育委員会が協力して有戸北バイパス関連の埋蔵文化財調査にあたることとした。青森県教育委員会では、平成15年度は文化財保護課、平成16年度は青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することになった。

平成16年4月には、十和田県土整備事務所高規格道路建設課、野辺地町教育委員会、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターが平成16年度の調査対象地等について現地協議を行ったが、この際に、平成15年度に文化財保護課が調査した向田<sup>36</sup>遺跡の南側の工事区域内で埋没途中の竪穴住居跡とみられる凹地を確認し、平安時代の遺物を採集したため、この丘陵地を向田<sup>37</sup>遺跡として青森県遺跡台帳に登録した上で、優先的に発掘調査することになった。さらに同年5月31日には、十和田県土整備事務所高規格道路建設課、野辺地町教育委員会、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターが発掘調査の進め方等について協議・確認し、埋蔵文化財調査センターが翌6月1日から調査を開始した。

しかし、調査対象面積が約8,600㎡（最終的には遺構・遺物の分布範囲3,400㎡を発掘調査）となったため、埋蔵文化財調査センターが予定している約2ヶ月の調査期間内では終了できる見通しが立たないので、同年6月14日に再度協議し、野辺地町教育委員会の協力を得て年度内の調査完了を目指すことにした。野辺地町教育委員会による向田<sup>37</sup>遺跡の発掘調査は、その他の地区の調査と併せて平成16年10月1日から11月30日まで実施され、予定どおり年度内に完了した。

### 第2節 調査要項

#### 1 調査目的

一般国道279号道路改築事業（有戸北バイパス）の実施に先立ち、当該地区に所在する向田<sup>37</sup>遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

#### 2 発掘調査期間

平成16年6月1日～同年8月12日

#### 3 遺跡名及び所在地

向田<sup>37</sup>遺跡（青森県遺跡番号40139）青森県上北郡野辺地町字向田379外



図1 遺跡位置図

## 4 調査面積

3,400m<sup>2</sup>

## 5 調査委託者

青森県土整備部高規格道路・津軽ダム対策課

## 6 調査受託者

青森県教育委員会

## 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

## 8 調査体制

調査指導員	藤沼 邦彦	国立大学法人 弘前大学人文学部教授 (考古学)
調査員	山口 義伸	青森県立浪岡高等学校教諭 (地質学)
	瀬川 滋	青森県文化財保護指導員 (考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	佐藤 良治 (現 青森県立図書館長)
	次長	福田 友之 (現 青森県立郷土館副館長)
	副参事	三浦 圭介 (現 次長)
	総務GL	工藤 和夫 (現 青森県商工労働部資源エネルギー課副参事)
	総括主幹	工藤 大 (現 調査第2GL)
	文化財保護主幹	小田川 哲彦
	文化財保護主事	小林 雅人 (現 つがる市立向陽小学校教諭)
	調査補助員	荒谷 伸郎 赤木 一甲 戸田 久恵 高橋 真澄

## 第3節 発掘作業の方法と経過

青森県埋蔵文化財調査センターでは、5月28日に調査器材等を現地へ搬入し、6月1日から発掘調査を開始した。調査対象面積(約8,600m<sup>2</sup>)に比べて調査期間(約2ヶ月)が短いので、効率的に調査を進めるため、調査対象区域全体に試掘用のグリッド・トレンチを設定し、先ず遺構・遺物の包含状態の確認を行った。地表面観察による凹地からは予想どおり埋没途中の竪穴住居跡が検出され、6月末には、丘陵地の平場から斜面上部にかけて、平安時代の集落を構成する遺構の分布することが判明した。しかし、斜面下方から沢地には遺構・遺物がみられないので、調査対象面積は約3,400m<sup>2</sup>に狭められた。遺構の検出と精査は凹地の確認から始め、竪穴住居跡周辺を除く出土遺物の希薄な区域の掘削には重機を多用したが、最終的な遺構の確認作業は8月前半までかかった。検出した遺構のうち、竪穴住居跡5軒、竪穴遺構2基、土坑8基、溝状土坑1基、溝跡2条、焼土4基の精査を終了し、8月12日には予定どおり調査器材・出土遺物等を搬出、現地から撤収した。溝跡、柱穴状ビット等、埋蔵文化財調査センターが精査できなかった遺構は、10月から野辺地町教育委員会が精査し、遺構をすべて精査した後で、遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。

発掘作業にあたっては、調査対象区域内に標準の座標と標高を備えた20m間隔の実測基準点（方位に合わせて一辺20mの方眼点）を測量業者に委託して設置し、これを基準として4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、北から南にアルファベット、東から西に算用数字を付けて、その北東隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標（旧日本測地系）は、K-15グリッドが $X = 103240.000 \cdot Y = 32780.000$ 、P-25グリッドが $X = 103220.000 \cdot Y = 32740.000$ 、U-30グリッドが $X = 103200.000 \cdot Y = 32720.000$ 等である。測量原点には、既存成果（平成12年度 第5-21-2号 国道279号道路改良路線測量業務委託）を利用し、T1-4（旧日本測地系で $X = 103193.045 \cdot Y = 32715.931$ ）、T1-5（同 $X = 103212.672 \cdot Y = 32734.937$ ）、T1-6（同 $X = 103263.605 \cdot Y = 32745.159$ ）を基準点として使用した。レベル原点も、既存成果（前出）のKBM1（地盤高25.061m）、BM17（地盤高30.629m）を与点として各実測基準点に標高を設置し、必要に応じ実測基準点から移動して使用した。

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したが、竪穴住居跡に伴うカマド等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量で縮尺

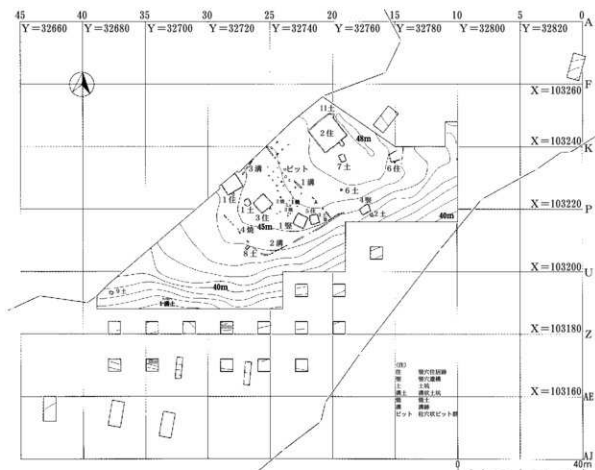


図2 グリッド・遺構配置図

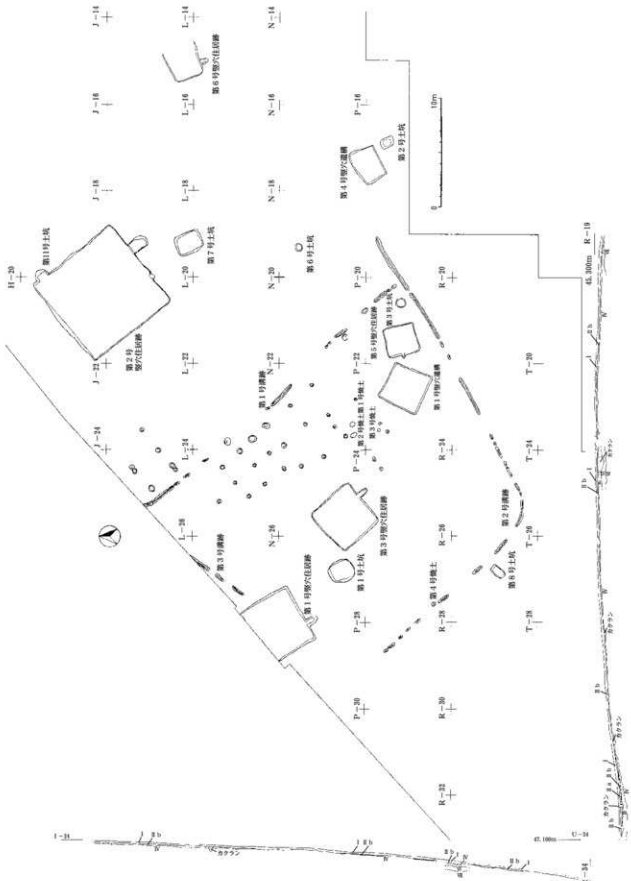


図3 遺構配置図

10分の1の実測図を作成した。埋没途中の竪穴住居跡とみられた凹地のうち規模の大きなもの（第2号竪穴住居跡）については、掘削前にトータルステーションにより地形測量を行った。

遺構内の出土遺物については、遺構単位で層位ごと又は堆積土一括で取り上げたが、床面（底面）やカマドの出土遺物については、トータルステーションや簡易遭り方測量により、必要に応じてドットマップ図・形状実測図等を作成した。遺構外の出土遺物については、原則としてグリッド単位で層位ごとに取り上げた。

写真撮影には、35ミリのモノクローム、カラーリバーサル2種類のフィルムを使用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、必要に応じてデジタルカメラも使用した。

#### 第4節 整理作業の方法と経過

平成16年8月には、向田跡遺跡の発掘作業が同年度で完了できる見通しが立ったので、平成17年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査報告書を作成することとなった。関係者間で協議し、野辺地町教育委員会が調査した分の整理作業は同教育委員会で行うが、報告書は埋蔵文化財調査センターがとりまとめて刊行することとした。

平成16年度内に、埋蔵文化財調査センターでは、発掘作業で作成した図面や写真等、記録類の整理を行い、出土遺物の洗浄・注記作業も一部行った。また、出土遺物のうちの鉄製品（刀子）2点の保存処理、炭化材32点の樹種同定を業者に委託した。野辺地町教育委員会では、遺構図面の整理等を行い、空中写真等も含めて、年度内に記録類を埋蔵文化財調査センターへ引き渡した。野辺地町教育委員会調査分の出土遺物はごく少量だったので、出土遺物については、平成17年度に埋蔵文化財調査センターがすべて整理することとした。

平成17年度には、遺構図面・データ等の整理、出土遺物の洗浄・注記等を行い、平成17年8月には土器類の接合・復元作業を終了し、報告書掲載遺物の選別後、実測・拓本・トレース等の作業を進めた。報告書掲載遺物の写真撮影は、同年12月に業者に委託して行った。また、炭化材25点の樹種同定と炭化種実の同定も業者に委託した。平成18年1月から、報告書の版下作成、原稿執筆、割付・編集等を行い、同年3月に報告書を刊行した。

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遭り方測量で作成したカマド等の付属施設の実測図やセクション図等との図面調整を行った。遺構・遺物のトレース及び実測図版、写真図版の版下作成は、基本的に手作業で行った。

遺構内出土遺物のうち、床面（底面）出土遺物や竪穴住居跡のカマド出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。遺構内の堆積土・貼床出土遺物、遺構外出土遺物については、特に図示しなかった。報告書掲載遺物については、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く資料的価値の高い資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別し、実測図及び観察表・計測表の作成、写真撮影等を行った。



## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡周辺の地形及び地質（図4～6）

青森県立浪岡高等学校教諭 山口 義伸

上北郡野辺地町の向田<sup>④</sup>遺跡は下北半島の頸部にあつて、西に陸奥湾が、東側に太平洋が位置している。頸部北方には吹越烏帽子岳、八部烏帽子岳、御宿山などが連なる山地が位置し、南部の陸奥湾奥部にあたる野辺地湾東方には丘陵化した最高位段丘及び高位段丘が分水嶺として展開している。また頸部中央部には、雲雀平、上弥平、弥栄平など、標高80m未満の開析度の大きい高位段丘が分布しているが、太平洋側では尾駈沼や鷹架沼が東西方向に大きく帯状に位置している。なお海岸線は、西の陸奥湾では大部分が植生の認められない浸食の激しい海崖が緩く湾曲しながら連続しており、東の太平洋側では海岸砂丘である天ヶ森砂丘が現汀線に並行して発達している。

ところで、野辺地湾東岸には中川(1972)によると、次のような5段の段丘面が分布している。等高線図(図4)で概観できるように、標高200m以下の等高線の間隔が広く段丘の発達を認識できる。北方では吹越烏帽子岳西方に分布し、南方の野辺地湾御奥部では標高約100mを稜線とし、東方の太平洋に向かって段丘群が発達している。

最高位段丘としての吹越烏帽子段丘群があつて、吹越烏帽子岳南麓には標高210～240mの高位面と、標高140～200mの低位面の2段が分布しており、開析度が大きく丘陵化している。高位段丘としては、標高100～130mの長者久保段丘と、広範囲に分布する標高50～90mの甲地段丘が分布している。高位の長者久保段丘は吹越烏帽子岳南麓と野辺地湾奥部の東側とに分極しており、低位の甲地段丘は北の吹越烏帽子岳南麓から南側の長者久保段丘を連結する形で広く分布している。高位段丘は全体として勾配がやや急であり、河谷による開析度も大きく南北に波打つような起伏に富んでいる。

中位段丘である標高15～40mの七鞍平段丘は現汀線に並行して分布している。陸奥湾側では幅2～3km、太平洋側では4～5kmの幅をもち、開析度が低くきわめて平坦な面をなし、陸奥湾側では本段丘上に縦列砂丘が発達している。なお小河川の流域内には、縄文時代草創期の遺物が出土した向田<sup>④</sup>遺跡の立地点ように、小規模な火砕流台地が認められる。

この地域の水系については小川原湖の排水河川である高瀬川、吹越烏帽子岳から南流する老部川、頸部中央部を北上して鷹架沼に至る後川、南流して小川原湖へ至る土場川、そして陸奥湾に注ぐ有戸川や千草橋川などがあげられる。このほか、本遺跡の南方を流れる向田川など、数多くの小河川は段丘面を刻む開析谷であつて、その流路はほとんど東西方向を示している。

遺跡周辺の地形発達については図5に示した。陸奥湾側に偏った稜線には長者久保段丘が点在し、これにほぼ連続して甲地段丘が北方へと延びている。いずれの段丘面も陸奥湾に注ぐ小規模な開析谷によって東西方向に大きく浸食され、南北に波打つように分布している。そして、比較的平坦な七鞍平段丘が湾岸に沿って2～3kmの幅で帯状に分布しており、面上は飛砂に覆われ縦列砂丘となっている。

次に、下北半島頸部を構成している地層について概説する。この地域の基盤岩は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層であつて、隆起帯である北部の吹越烏帽子岳を含む山地に分布している。泊安

山岩類は安山岩質溶岩、同質凝灰角礫岩及び同質凝灰岩からなる。鷹架層は凝灰質砂岩及びシルト岩からなり、泊安山岩類上部と指交関係にあって、鷹架沼周辺で確認できる。

この地域に広く分布する地層として、新第三紀鮮新統の甲地層と、甲地層を覆う第四紀更新統の野辺地層である。甲地層及び野辺地層とも、全般的に高位段丘を構成する堆積物で覆われていることから、この地域を流れる開析谷の流域内でしか確認できない。甲地層は砂岩と砂質シルト岩との互層からなり、下位の中新統を不整合に覆っている。野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位

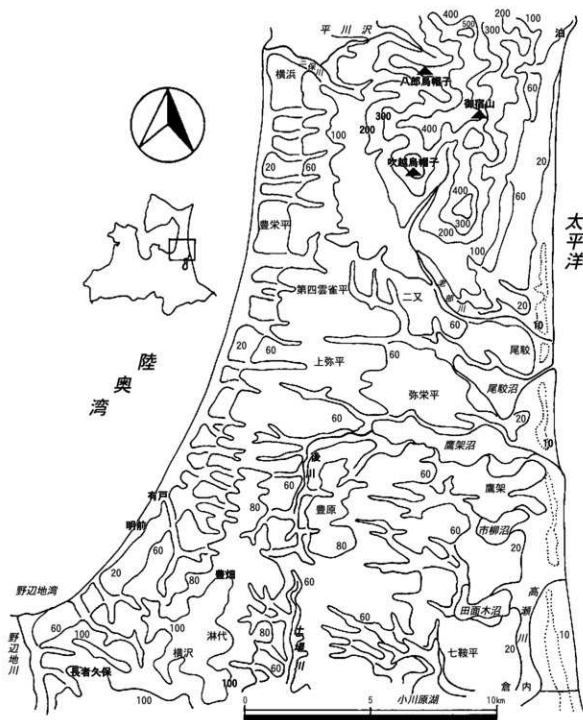


図4 下北半島頸部の等高線図

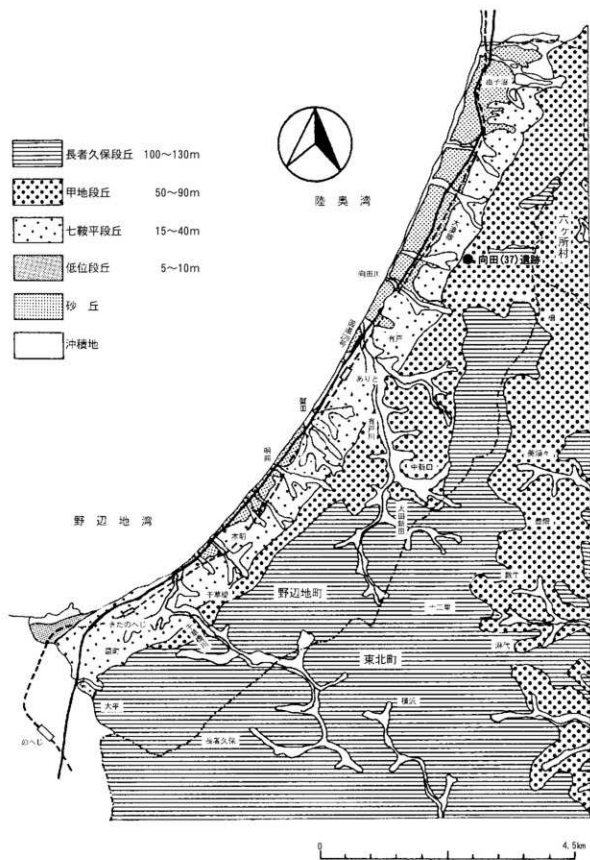


図5 野辺地町東部の地形分類図（野辺地町教育委員会，2004に加筆・修正）

の新第三系を不整合に覆い、ほぼ水平に堆積している。

ところで、向田の遺跡の調査区域は野辺地湾奥部から北東方に約9.5km離れた甲地段丘末端部に立地している。陸奥湾岸から約1km内陸部にあつて、向田川の北方を流れる浸食谷の、上流にみられる分流に挟まれた稜線上に位置していることから、南北両端が谷底まで比高約15mもある急斜面となつている。このため、調査区はやや東西方向に平坦な標高約50mの頂部から標高約45mの急斜面にかけて、北東-南西方向に帯状の範囲を示している。

遺跡調査区域内の基本土層(図6)については、東西方向のRラインでの層相をもとに述べたい。なお、調査区域が甲地段丘末端部に位置することから高位段丘構成層が欠如しており、低位段丘の指標火山灰である千曳浮石が直接に野辺地層を覆っている。

第I層 黒褐色土(10Y R2/2) 表土で、粘性・湿性にやや欠ける。固さはあるが締まりに欠け、乾くとブロック状の割れが目立ち、灰黒色に変色する。

第II a層 暗褐色土(10Y R3/3) 谷状凹地内の堆積物である。全体的にロームブロックや下位の第VII層(細粒砂)のブロックの混入が目立ち、また平安時代の遺物が流れ込み含まれている。

第II b層 黒褐色土(10Y R3/2) 多少締まりがあるが、固さがなく全体的にソフトな感じがする。粘性・湿性がややあり、乾くとラフなクラックが発達する。焼土粒・ローム粒・細粒砂がかなり多く混入しており、平安時代の遺構確認面となっている。本層上部には白頭山起源の苫小牧火山灰(B-Tm)が薄く層状に、あるいは場所によってはブロック状に堆積する。また直下には十和田カルデラ起源の十和田a火山灰(To-a)が小ブロック状に堆積する箇所もある。

第III層 黒色土(10Y R1.7/1) 腐植質土である。粘性・湿性があり、全体的に締まっている。谷状凹地に堆積する。縄文時代後期の遺物が含まれている。

第IV層 暗褐色土(10Y R3/4) 漸移層である。粘性・湿性があり固く締まっている。ロームブロックや直下のV層(軽石)のブロックが多量に混入している。なお、V層とは不規則な凹凸面で接しており、大きく浸食している。

第V層 黄褐色軽石(10Y R5/8) 緻密堅固なラピリ質軽石層である。低位段丘の構成層である千曳浮石に相当する。平場では浸食され欠如するか、ブロック状の堆積を示す。

第VI層 黄褐色ローム(10Y R5/6) 固く締まった粘土質なロームである。最上部には堅固な灰褐色ロームがみられ、V層(軽石)が降下する前の堆積間隙を示す。

第VII層 明黄褐色砂(10Y R6/8) 緻密堅固な細粒砂で、基盤をなす野辺地層に相当する。

#### 引用文献

- 東北地方第四紀研究グループ 1969 東北地方における第四紀海水準変化「専報第15号 日本」の第四系」地学団体研究会
- 中川久夫 1972 第二部 青森県の第四系「青森県の地質」青森県
- 青森県教育委員会 1975 「千歳遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
- 青森県教育委員会 1983 「松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告

## 書第77集

野辺地町教育委員会 2001 「明前(4)遺跡・明前(5)遺跡・野辺地蟹田(11)遺跡」 野辺地町文化財  
調査報告書第9集

野辺地町教育委員会 2004 「向田(8)遺跡」 野辺地町文化財調査報告書第14集

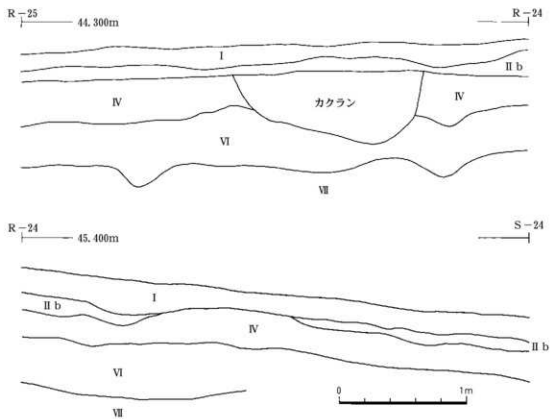


図6 基本土層

## 第2節 周辺の遺跡－野辺地町管内の古代集落跡－（図7）

青森県文化財保護指導員 潮川 滋

野辺地町管内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が現在142箇所登録されている。その内、向田<sup>07</sup>遺跡と同時代の平安時代の遺跡は44箇所を数える。本稿では、この平安時代の遺跡について記載する。

野辺地町管内における平安時代の遺跡の調査は、昭和28年度に斉藤忠らによって行われた明前館（明前<sup>1</sup>遺跡）の学術調査が起点になっている。昭和51年度には再度、青森県教育委員会により明前<sup>1</sup>遺跡の調査が実施された。調査では、10世紀代の竪穴住居跡が1軒検出され、三重の空掘りで形成される環濠跡が測量調査により記録されている。その後平成13～15年度には、野辺地町教育委員会により二十平<sup>1</sup>遺跡が調査され、二重構造の葉研堀を巡らす大規模な環濠集落跡が検出された。堀跡は平安時代の鍵層である白頭山起源の苦小牧火山灰の堆積層を断ち切って構築されており、10世紀中葉以降の構築年代が与えられている。特筆すべき出土遺物としては、遠隔地との交易・交流を示す近江産の緑釉陶器が挙げられる。緑釉陶器は最北端の出土事例である。平成15年度には、同教育委員会により坊ノ塚<sup>2</sup>遺跡が調査され、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡が2軒検出された。また、調査区の背後に連なる丘陵の頂部は、中世代の山城跡と認定され、平安時代の防御性集落と中世山城が重層している可能性が指摘された。

平成7年度からは、向田<sup>07</sup>遺跡の調査の原因となった一般国道279号道路改築事業に伴う調査が始まり、平安時代の遺跡が5箇所調査された。平成11～12年度には、野辺地町教育委員会により有戸島井平<sup>4</sup>遺跡が調査され、9世紀末から10世紀初頭の竪穴住居跡が4軒検出された。4軒の住居跡は、全て焼失家屋という特異な状況で検出されている。平成12年度には、同教育委員会により野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡も調査が行われて空掘跡を検出し、地主からの情報を基礎として環濠集落跡の全景規模が図示された。平成14年度には、同教育委員会により向田<sup>06</sup>遺跡が調査され、苦小牧火山灰の降下時に前後する竪穴住居跡が4軒検出され、調査区外からも埋没途中の竪穴住居跡と考えられる落ち込み跡が5箇所確認されている。

平成13～14年度にかけては、青森県埋蔵文化財調査センターにより向田<sup>06</sup>遺跡と向田<sup>05</sup>遺跡の調査が実施された。向田<sup>06</sup>遺跡の調査では、10世紀中葉以降の竪穴住居跡が3軒検出され、調査区外からも竪穴住居跡と考えられる落ち込み跡が数箇所確認されている。向田<sup>05</sup>遺跡の調査では、竪穴住居跡の検出総数が80軒を数える大規模集落跡が発見された。集落は斜面地をひな壇状に削平し、そのテラス状の平場に竪穴住居を配置する構造で、その斜面地の居住区の背後に広がる丘陵の頂部には、空堀で囲郭した首長層の居住空間と推定される環濠を有する。環濠周辺の丘陵頂部には、土地利用の規制であろう区画溝を配した居住区も検出されている。この様な集落内での階層を明確に示した居住空間のパターンは、大規模防御性集落として注目される八戸市林ノ前遺跡にも見られる。当時の集落構成の基礎的類型として貴重な調査報告である。

当該時期における調査の概略を述べたが、調査の大方は平成11年度以降に実施されたものであり、これらの調査や分布調査により、平安時代の遺跡分布の実態が漸く把握されてきたという状況である。当該地の遺跡は野辺地町の前庭部にあたる、むつ湾沿岸と並走する中位段丘の低位部（10～20m）が



- |             |               |                |              |
|-------------|---------------|----------------|--------------|
| 1 向田(7)遺跡   | 12 向田(2)遺跡    | 23 野辺地蟹田(10)遺跡 | 34 浜掛(1)遺跡   |
| 2 向田(6)遺跡   | 13 向田(24)遺跡   | 24 明前(1)遺跡     | 35 八幡町遺跡     |
| 3 向田(5)遺跡   | 14 向田(23)遺跡   | 25 古明前(1)遺跡    | 36 二十平(1)遺跡  |
| 4 向田(8)遺跡   | 15 向田(36)遺跡   | 26 有戸島井平(1)遺跡  | 37 家ノ上(1)遺跡  |
| 5 向田(34)遺跡  | 16 向田(35)遺跡   | 27 有戸島井平(4)遺跡  | 38 槻ノ木(4)遺跡  |
| 6 向田(1)遺跡   | 17 小沢平(1)遺跡   | 28 有戸島井平(2)遺跡  | 39 二十平(2)遺跡  |
| 7 向田(7)遺跡   | 18 野辺地蟹田(4)遺跡 | 29 木明(2)遺跡     | 40 獅子沢遺跡     |
| 8 向田(3)遺跡   | 19 野辺地蟹田(3)遺跡 | 30 干草橋(5)遺跡    | 41 陣場川原(3)遺跡 |
| 9 有戸浜遺跡     | 20 野辺地蟹田(6)遺跡 | 31 坊ノ塚(5)遺跡    | 42 大平下(1)遺跡  |
| 10 向田(20)遺跡 | 21 野辺地蟹田(7)遺跡 | 32 坊ノ塚(1)遺跡    | 43 田端(2)遺跡   |
| 11 向田(2)遺跡  | 22 中新田(2)遺跡   | 33 大撫沢遺跡       | 44 上小中野(1)遺跡 |

図7 野辺地町管内の古代集落跡

ら高位段丘の低・中部位（40～70m）にかけてほぼ全域に分布するが、前述した調査の結果と昨今の分布調査により、向田<sup>37</sup>遺跡が位置するむつ湾東岸域方面に集中的に分布することが解ってきた。下北半島の頸部にあたる当該地は、太平洋岸との分水嶺として連なる高位段丘（千歳段丘）を源とする小河川の流出侵食により、幾筋もの谷地形が形成されている。平安時代の集落跡は、この谷地形の頂部と緩やかな傾斜地に展開する配置構成が基本となっているが、海岸沿線に近接遺存する遺跡も数箇所ある。海岸近辺に分布する遺跡の内、集落跡として認められるものは有戸浜遺跡と野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡である。有戸浜遺跡は急崖海岸段丘と河川の浸食壁に囲まれた、天然の要害を活用した防御性集落の様相を呈している。以前は埋まりきらない竪穴住居跡と考えられる落ち込み跡が相当数確認できたが、現在は耕作のため凹凸は消滅してしまった。野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡は蟹田川により入り組み状に浸食された低位の河岸段丘に位置し、河川の流路と空堀で集落を囲郭した津軽型防御性集落の情景を呈する。当環濠集落跡の背後に位置する野辺地蟹田<sup>6</sup>遺跡と野辺地蟹田<sup>7</sup>遺跡は相方とも竪穴住居跡と考えられる落ち込み跡を伴う集落跡であるが、野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡の環濠の囲郭内、もしくは同時空間にあった集落の可能性が高い。環濠はJR大湊線により間断されており、全容は不明である。他に海岸近辺に位置する遺跡としては向田<sup>5</sup>遺跡、向田<sup>30</sup>遺跡、向田<sup>1</sup>遺跡、向田<sup>13</sup>遺跡が登録されているが、各遺跡とも海岸段丘の直上部から採集された遺物（主に土師器）によって得られた情報によるもので、竪穴住居跡である落ち込み跡などの遺構を伴ったものではない。

これらの海岸近辺に遺存する当該時期の遺物散布地の中の幾つかは、土器製法による塩生産に関わる遺跡であろうと推察している（潮川2003 向田<sup>24</sup>遺跡）。向田<sup>37</sup>遺跡の調査においても、塩生産地からの搬入品と考えられる白砂式製塩土器が出土している。

海岸部の低・中部位段丘から内陸部方面に向けて比高を上げる高位段丘の台地や谷地形の頂部に集落を形成する当該地における基本形の集落跡は遺跡調査の概略で述べたが、明前<sup>1</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡、向田<sup>24</sup>遺跡、向田<sup>34</sup>遺跡、向田<sup>35</sup>遺跡などを代表とする。この中で防御性集落跡に伴う標準的な施設である空堀による環濠を設けた遺跡は、明前<sup>1</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡、向田<sup>35</sup>遺跡である。この内、明前<sup>1</sup>遺跡と向田<sup>35</sup>遺跡の集落形態は首長層の居住空間のみを円形の空堀で囲郭する、所謂上北型防御性集落の形態を成す集落跡である。野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡は丘陵に集落を囲郭する空堀を巡らし、郭内中央部を堀で切断した連郭構造を成す、所謂津軽型防御性集落とされる形態の集落跡である。防御性とする概念で集落構造を捉えるならば、向田<sup>37</sup>遺跡も空堀はないが、集落の両縁が急崖斜面に挟まれる地形的要害に守られた防御性集落の様相を十分保っている。

明前<sup>1</sup>遺跡と野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡は同谷の浸食丘陵に位置しており、明前<sup>1</sup>遺跡から野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡間の距離は約0.5km、野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡から海岸近辺に位置する野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡間は約1.0kmと近接している。三者間は直線的に連立位置しており、三連の複郭状を呈している。この三連の環濠集落間の道程上には竪穴住居跡と考えられる埋まりきらない落ち込み跡が集中分布している。野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡の調査では、環濠集落相互の交通を示唆する古道跡が検出されている。古道は野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡の環濠集落跡から明前<sup>1</sup>遺跡が位置する山頂部へ直進する状況を呈し、野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡の集落を囲郭する空堀の部位からは、その古道を渡す状況で版築構造の土橋状遺構が検出されている。この三連の環濠集落が同時空間で一気阿成に築かれたとは断定できないが、至近距離で築かれている複郭的な構造からは、それぞれ単郭毎に孤立した生活空間を築いていたとは想像し難い。



このような複郭の構造の景観は、集落構成員の増員（移住者？）により徐々に複合的な集落構造へ進展したものと読み取られる。

このような複合的な集落構造の景観を実例として、分散して配置する遺跡を広範囲な視野で展望すると、当地域は縄張り的な情景で遺跡（集落）を数単位に統括配分することができる。向田<sup>05</sup>遺跡が位置する、むつ湾東岸域の集落構成は大きく三分割に統括区分される。三分割の内の二分区分は有戸川流域を境として分割される。有戸川の南岸段丘上をエリアとして統括した集落区は前述したが明前<sup>1</sup>遺跡（上北型防御性集落）を統括集落の拠点として、野辺地蟹田<sup>11</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>3</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>4</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>6</sup>遺跡、野辺地蟹田<sup>7</sup>遺跡等をエリア内に取り込む情景を呈している。有戸川の北岸段丘上をエリアとして統括した集落区は向田<sup>35</sup>遺跡（上北型防御性集落）が主要拠点となる情勢を呈しており、有戸浜遺跡、向田<sup>21</sup>遺跡、向田<sup>22</sup>遺跡、向田<sup>23</sup>遺跡、向田<sup>24</sup>遺跡、向田<sup>36</sup>遺跡などをエリア内に取り込む情景である。もう一つの分区エリアは巫子沼を主体とする湖沼群の周辺に集落を構成するものであるが、当エリアは全域が牧場地内にあり、詳細な分布状況は掘っていない。集落の統括配分は野辺地町の市街地周辺に展開分布する遺跡においても可能である。当地域は野辺地川の沖積地形により東、西に二分割される。東側の段丘上エリアには大無沢遺跡や坊ノ塚<sup>1</sup>遺跡の環濠集落を拠点とした集落が構成されており、西側の段丘上エリアには二十平<sup>1</sup>遺跡を主要とした集落が構成される。このような広域的空間エリアで捉えた集落、集団が一樣に同時空間で存在したとは勿論考えではないが、地域的な部族統制の概観を若干ながら推測できよう。

大まかに平安時代の遺跡分布の状況を述べたが、当該地における平安時代とする集落構成の年代観は9世紀後半から10世紀代に集約されており、青森県域における平安時代の集落構成経過の年代的な通説を踏襲している。現在までのところ当該地では上記の年代以前の8世紀代とする奈良時代の遺跡は全く発見されていない。平安時代の集落が前代の波及を全く得ずに構成されるとは考えられない。当地域での調査研究の課題として、この空白期を埋めることを目標としておきたい。

#### 参考文献

- |           |      |  |
|-----------|------|--|
| 青森県教育委員会  | 1981 | 明前遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第66集   |
| 青森県教育委員会  | 2003 | 野辺地蟹田 <sup>10</sup> 遺跡Ⅱ・野辺地蟹田 <sup>12</sup> 遺跡・向田 <sup>36</sup> 遺跡<br>青森県埋蔵文化財調査報告書第343集 |
| 青森県教育委員会  | 2004 | 向田 <sup>35</sup> 遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第373集   |
| 青森県教育委員会  | 2005 | 林ノ前遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第396集   |
| 野辺地町教育委員会 | 1991 | 野辺地町の遺跡 野辺地町文化財調査報告書第3集  |
| 野辺地町教育委員会 | 2000 | 向田 <sup>24</sup> 遺跡・有戸島井平 <sup>4</sup> 遺跡・有戸島井平 <sup>5</sup> 遺跡<br>野辺地町文化財調査報告書第7集       |
| 野辺地町教育委員会 | 2002 | 明前 <sup>4</sup> 遺跡・明前 <sup>5</sup> 遺跡・野辺地蟹田 <sup>11</sup> 遺跡<br>野辺地町文化財調査報告書第9集          |
| 野辺地町教育委員会 | 2003 | 有戸島井平 <sup>4</sup> 遺跡Ⅱ・向田 <sup>24</sup> 遺跡Ⅱ 野辺地町文化財調査報告書<br>第11集                         |
| 野辺地町教育委員会 | 2003 | 坊ノ塚 <sup>2</sup> 遺跡 野辺地町文化財調査報告書第12集   |
| 蝦夷研究会     | 2005 | 北日本古代防御性集落をめぐって 蝦夷研究会青森大会シンポジウム  |
| 青森県       | 2005 | 「二十平 <sup>1</sup> 遺跡」 青森県史-資料編考古学3 弥生-古代   |

## 第3章 調査の成果

### 第1節 検出遺構と出土遺物

平安時代の竪穴住居跡5軒、竪穴遺構2基、土坑8基、溝跡3条、柱穴状ビット34基、焼土4基、縄文時代の溝状土坑1基を検出・精査した。

#### 1 竪穴住居跡

発掘作業時には、6基の遺構(略号S I 01~06)を竪穴住居跡として精査したが、精査の結果、この中の1基(略号S I 04)はカマドを伴わないことが分かったので、整理作業ではこの遺構を竪穴遺構に含めた。竪穴住居跡として整理作業を行った5軒については、発掘作業時の略号に基づいて、第1~3・5・6号竪穴住居跡(略号S I 01~03・05・06)として報告する。第4号竪穴住居跡は欠番とした。

#### 第1号竪穴住居跡(図8-14、写真1-6)

【位置・確認】M・N-27・28グリッドに位置する。地表面観察でも少し凹地となっていたので、埋没途中の竪穴住居跡とみられたが、基本土層の第I層(表土)を掘り下げた後、第III層上面(第II a・b層は欠落)で、黒色土の落ち込みとして本遺構の平面形を確認した。本遺構の北西側が一部調査区域外に位置するので、北西壁の大半と西隅部分は未調査である。

【形態・規模】平面形は、確認面、床面ともやや不整形な方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で4.95m、床面で4.81m、南東壁が確認面で5.47m、床面で5.30mである。丘陵地の傾斜がやや大きくなる場所に作られており、斜面上方(北東側)では基本土層の第V層まで、斜面下方(南西側)では第III層まで掘り込んだ後、掘削した地山の土を利用して、全体に10~5cmの厚さで貼床をしている。確認面からの壁高は60~45cmほどである。壁面は全体として上部の崩れが目立ち、少し壁の傾斜が緩くなっている。床面には大きな凹凸があり、全体として南西に傾斜している。精査した範囲の床面積は、約24.00㎡である。

【ビット等】床面及び貼床下で、柱穴状の小ビットと土坑状のやや大きなビットを計19基(ビット1~3、土坑1~16)確認した。北・東・南隅で検出した小ビット(ビット1~3)は、本遺構の4隅に配置される柱穴とみられる。やや大きなビット(土坑1~16)は、床面の東側から多く検出され、土師器片等が少しまとまって出土したもの(土坑3・5・8・11・13等)もあるので、貯蔵穴や廃棄穴の類とみられる。土坑1・4は重複しているが、新旧関係は不明である。

【付属施設】南東壁の中央から南西寄り、半地下式のカマドが設置されている。カマドの主軸方位は、N-149°-Eである。カマドは遺存状態が悪く、煙道部と火床面は確認されたが、カマド本体はほとんど残っていない。袖部等の芯材の一部と思われる焼けた粘土塊は、燃焼部から散乱した状態で出土した。火床面は53×40cmの大きさと、最大15cmほど掘り込まれている。この他、床面の中央からやや西寄りにも焼土(焼土1)が堆積していた。壁溝は検出されなかった。

【堆積土】黒色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土(基本土層の第IV・V層)が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示して

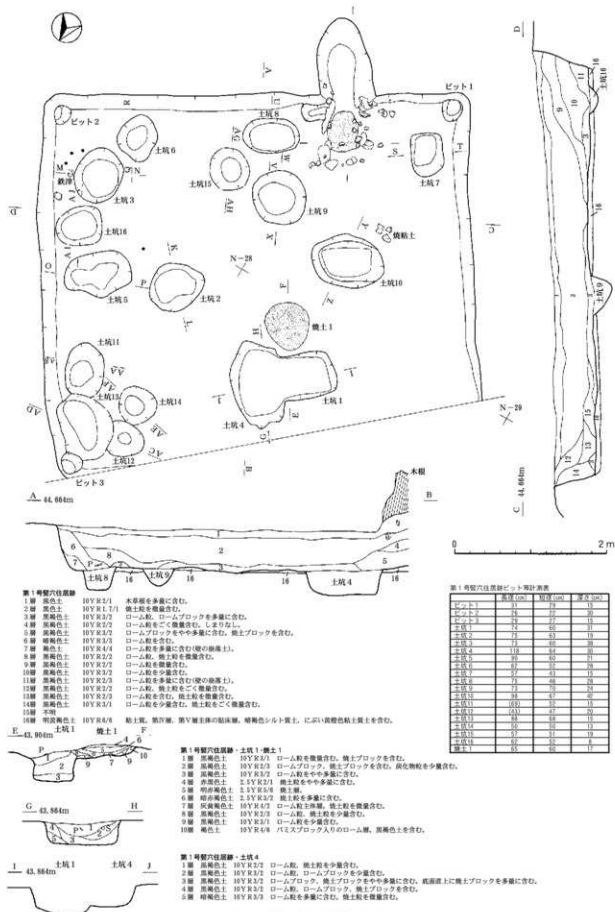


図8 第1号竪穴住居跡(1)



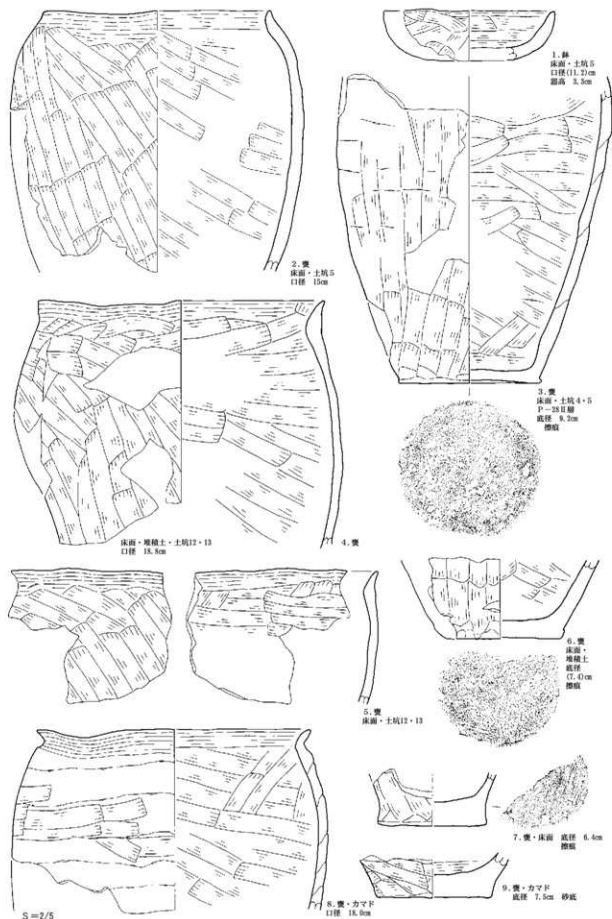


図10 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)

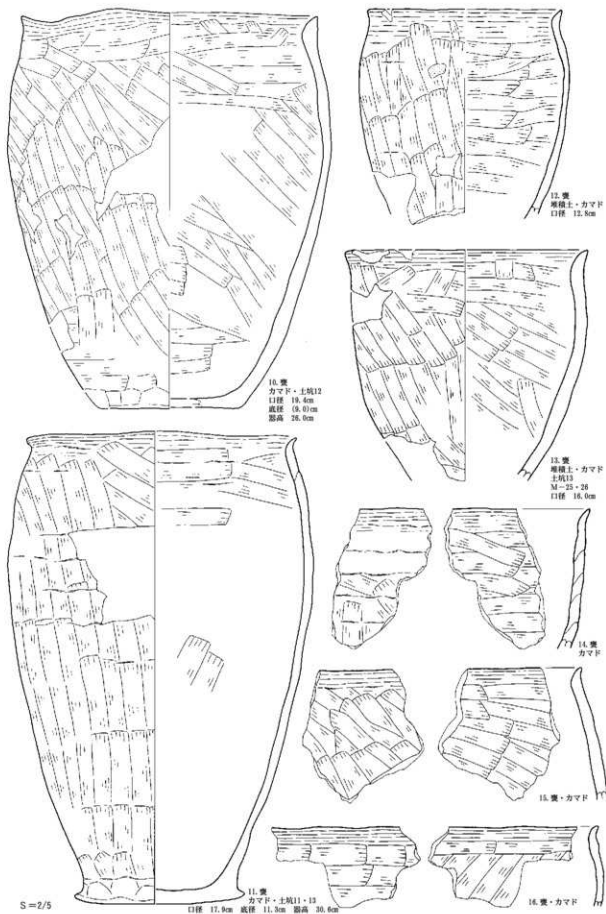


図11 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)

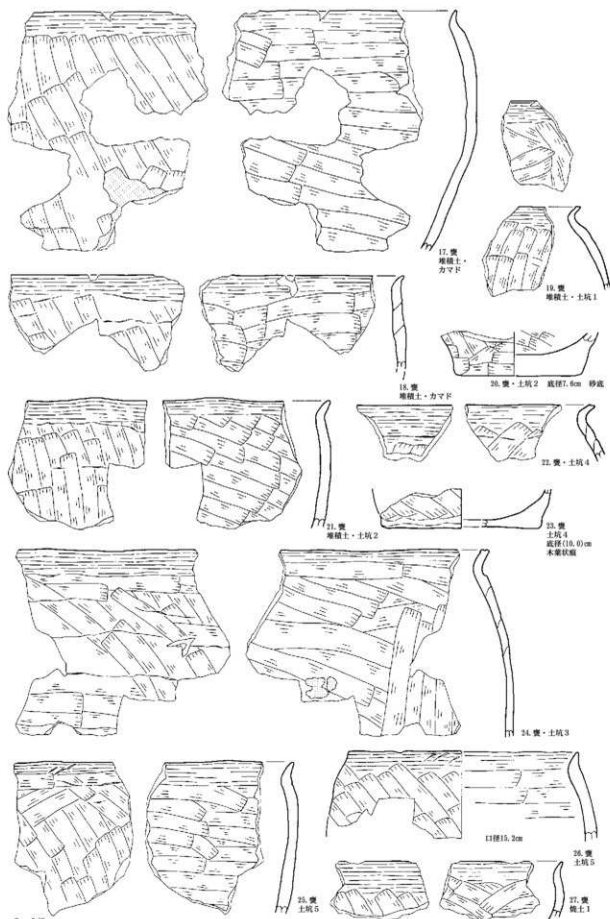


図12 第1号竪穴住居跡出土遺物(3)

いる。

【出土遺物】土師器773点（約10,250g）（図10-13-1~33）、須恵器15点（約570g）（図13-34~35）、羽口・支脚16点（約510g）（図14-36~37）、石器2点（図14-38~39）、鉄滓1点（約603g）等が出土した。

出土箇所の内訳は、住居跡の床面から土師器（襷）21点（約500g）、石器（礫石器）1点、鉄滓1点（約603g）/住居跡の堆積土から土師器（襷）362点（約2,590g）、須恵器（壺・襷）15点（約570g）、羽口・支脚16点（約510g）/カマドの堆積土から土師器（襷）120点（約2,040g）/土坑1の堆積土から土師器（襷）9点（約115g）/土坑2の堆積土から土師器（襷）16点（約340g）/土坑3の堆積土から土師器（襷）25点（約365g）/土坑4の堆積土から土師器（襷）14点（約335g）、石器（礫石器）1点/土坑5の堆積土から土師器（襷）74点（約1,380g）/土坑7の堆積土から土師器（襷）17点（約230g）/土坑8の堆積土から土師器（襷）29点（約590g）/土坑9の堆積土から土師器（襷）4点（約35g）/土坑11の堆積土から土師器（襷）17点（約380g）/土坑12の堆積土から土師器（襷）26点（約465g）/土坑13の堆積土から土師器（襷）26点（約675g）/土坑14の

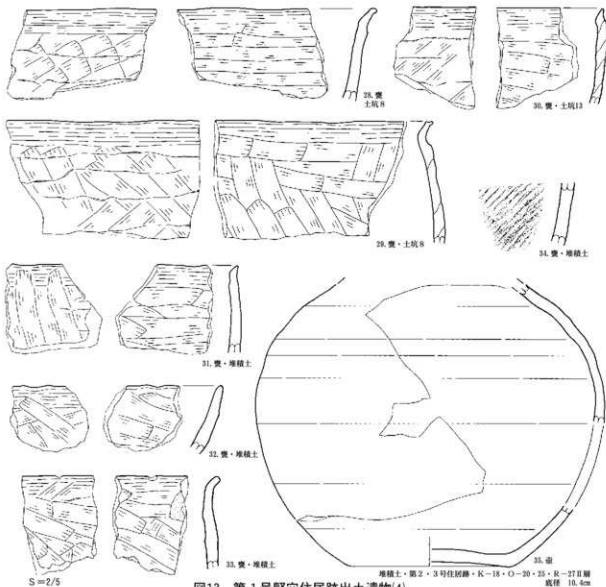


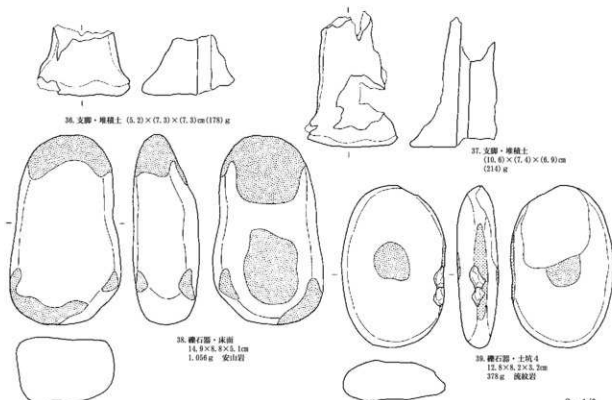
図13 第1号竪穴住居跡出土遺物(4)



堆積土から土師器(甕) 2点(約15g) / 土坑15の堆積土から土師器(甕) 3点(約115g) / 土坑16の堆積土から土師器(甕) 3点(約35g) / 焼土1の堆積土から土師器(甕) 5点(約45g)。

土師器の接合状態は、住居跡床面・住居跡堆積土出土資料の接合1例(図10- 6) / 住居跡床面・住居跡堆積土・土坑12堆積土・土坑13堆積土出土資料の接合1例(図10- 3) / 住居跡床面・土坑5堆積土出土資料の接合2例(図10- 1・2) / 住居跡床面・土坑12堆積土・土坑13堆積土出土資料の接合1例(図10- 5) / 住居跡床面・土坑4堆積土・土坑5堆積土・P- 28グリッド出土資料の接合1例(図10- 4) / 住居跡堆積土・カマド堆積土出土資料の接合3例(図11- 12・12- 17・18) / 住居跡堆積土・カマド堆積土・土坑13堆積土・M- 25・26グリッド出土資料の接合1例(図11- 13) / 住居跡堆積土・土坑2堆積土出土資料の接合1例(図12- 21) / 住居跡堆積土・土坑4堆積土出土資料の接合2例(図12- 23他) / 住居跡堆積土・土坑5堆積土出土資料の接合2点 / カマド堆積土出土資料の接合2例(図10- 8・11- 16) / 土坑1堆積土出土資料の接合1点 / 土坑3堆積土出土資料の接合1例(図12- 24) / 土坑5堆積土出土資料の接合1例(図12- 26) / 土坑7堆積土出土資料の接合2例 / 土坑8堆積土出土資料の接合2例(図13- 28他) / 土坑5堆積土・土坑13堆積土出土資料の接合1例。

須恵器の接合状態は、住居跡堆積土・第2号住居跡3層・第3号住居跡堆積土・K- 18、O- 20・25、R- 27グリッド出土資料の接合1例(図13- 35)。



S=1/3

図14 第1号竪穴住居跡出土遺物(5)

## 第2号竪穴住居跡(図15-29、写真1-3・7・8・11)

【位置・確認】I・J-18、H・I・J・K-19-21、I-22グリッドに位置する。地表面観察で凹地となっており、埋没途中の竪穴住居跡とみられたので、掘削前に地形測量を行った。かなり大きな凹地であり、平面形も大略は把握できたので、基本土層の第I層(表土)からセクションベルトを設定して本遺構の掘削を進めた。ただし、堆積土を掘り下げていく途中では、必要に応じて第II a層上面又は第IV層上面(第II a・b層、第III層が欠落したところ)で、黒褐色土等の落ち込みとして平面形の細部を確認した。

【重複関係】本遺構の北東壁の北隅寄り、第11号土坑と重複する。第11号土坑の南西側を本遺構が切っている。

【形態・規模】平面形は、確認面、床面ともやや不整形な方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で8.98m、床面で8.82m、南東壁が確認面で9.12m、床面で8.72m、南西壁が確認面で8.93m、床面で8.76m、北西壁が確認面で9.12m、床面で8.91mである。基本土層の第V層まで掘り込んだ後、壁寄りでは掘削した地山の土で最大20cmほどの厚さで貼床をしているが、壁寄りを除いた大部分では第V層を直接床面としている。確認面からの壁高は70-45cmだが、床面中央部の堆積土は20cmほどである。壁面は全体的に崩落がみられ、壁の傾斜が緩くなっている。床面には緩い凹凸があり、全体として西に傾斜している。床面積は74.14㎡である。本遺構は焼失した住居跡で、堆積土や床面等から炭化した建築材や焼土等が出土した他、床面の強く被熱した部分が5箇所(焼土1-5)確認された。

【ビット等】床面及び貼床下で柱穴状の小ビットと土坑状のやや大きなビットを計27基(ビット1・2・3a・3b・4・5a・5b・6-13、土坑1-7・10-14)確認した(土坑7・8は欠番)。このうち、床面の4隅寄りで検出した小ビット(ビット1-4)が略方形に配置される本遺構の主柱穴とみられるが、いずれも深さが30-20cm前後の比較的浅いビットである。やや大きなビット(土坑1-7・10-14)は床面の東隅寄りから多く検出され、貯蔵穴や廃棄穴の類とみられるが、土坑3の堆積土上部から、貯蔵穴の蓋とみられる炭化した板材が出土した。ビット3a・3b、ビット5a・5b、土坑2・7・11、土坑10・12・13は各々重複しており、ビット3aがビット3bを、土坑7が土坑11を、土坑10・12が土坑13を各々切っている。その他の新旧関係は不明である。

【付属施設】南東壁の中央から南西寄りに、半地下式のカマドが設置されている。カマドの主軸方位は、N-141°-Eである。カマドは遺存状態が悪く、煙道部のごく一部と火床面は確認されたが、カマド本体は全く残っていない。火床面上には、支脚として利用したとみられる土師器(椀)の底部が2片、伏せた状態で重なっていた。火床面は87×69cmの大きさと、最大20cmほど掘り込まれている。カマド寄りの床面には、カマドの主軸方向と直交するごく低い段差が約2.4mにわたって確認された。また、カマドの煙道方向へ壁から約2.0m離れた屋外にも、薄い焼土(焼土6)が堆積していた。カマドが設置されている南東壁の中央から北東寄りには、スロープ状の出入口が設けられている。出入口は幅約1.1mで、約1.6m屋外に延びており、床面とは15cmほどの段差がある。壁溝は、第11号土坑及び土坑2と重複する部分では確認できなかったが、カマドと出入口が設置された部分を除いて住居跡をほぼ全周する。壁溝の深さは、30-4cmである。

【堆積土】焼失した住居跡なので、床面直上の堆積土(4層)には、炭化材、炭化物、焼土等が多量に含まれている。その上部は暗褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土(基本土層の第IV・V層)が多

く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、家屋焼失後の堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕土師器1,965点(約26,474g)(図21-25-1-54)、須恵器668点(約24,901g)(図25-27-55-71)、製塩土器119点(約1,593g)(図27-72-77)、羽口・支脚34点(約1,753g)(図28-78-81)、石器7点(図28・29-85-91)、木製品1点(図28-84)、鉄製品2点(図28-82・83)、鉄

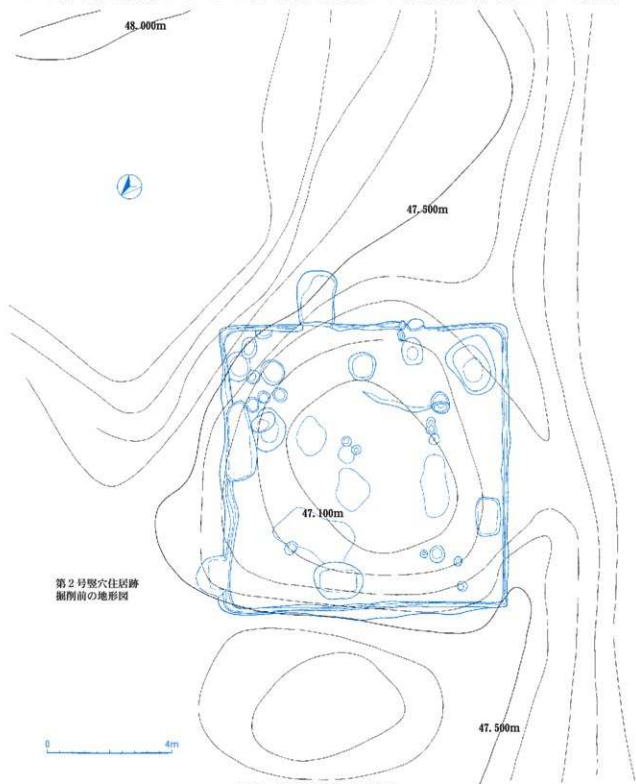


図15 第2号竪穴住居跡(1)



滓12点(約196g)等が出土した。この他、カマドの火床面前には、焚き付けに用意したとみられる長さ1.0mほどの炭化した丸木材が数本残っていた。木製品(炭化した木製の容器)は、火床面の約2.0m南西の床面から伏せた状態で出土した。容器の内面側は既に腐蝕しており、内面全体と口縁部を欠損しているが、形状から考えて甕とみられる。厚さ3cm以上の椀目板を削り、成形したものである。カマド前の段差から火床面寄りの床面には、炭化した種実が残っていた(付章第2節参照)。また、東隅に近い南東壁際の4層から、貝殻(カキ?)が2点出土した。

出土箇所の内訳は、住居跡の床面から土師器(坏・甕)388点(約5,802g)、須恵器(壺・甕)58点(約1,043g)、製塩土器43点(約388g)、羽口1点(約51g)、木製品1点、鉄滓7点(約33g)/住居跡の堆積土4層から土師器(坏・甕)74点(約1,129g)、須恵器(壺・甕)442点(約22,163g)、製塩土器32点(約448g)、羽口・支脚23点(約805g)、石器(砥石・礫石器)6点、鉄製品(刀子)1点、鉄滓2点(約8g)/住居跡の堆積土3層から土師器(坏・甕)540点(約5,854g)、須恵器(壺・甕)111点(約865g)、製塩土器15点(約195g)、石器(礫石器)1点/住居跡の堆積土2層から土師器(甕)171点(約2,389g)、須恵器(壺・甕)25点(約275g)、製塩土器1点(約20g)、支脚1点(約250g)、鉄製品(刀子)1点/住居跡の堆積土1層から土師器(坏・甕)216点(約2,699g)、須恵器(壺・甕)12点(約100g)/住居跡の堆積土から土師器(甕)76点(約1,114g)、須恵器(甕)1点(約10g)/住居跡を覆う基本土層の第I層から土師器(甕)118点(約843g)、須恵器(甕)8点(約340g)/カマドの堆積土から土師器(坏・甕)37点(約1,051g)、羽口9点(約647g)/土坑1の堆積土から土師器(甕)19点(約348g)/土坑3の堆積土から須恵器(甕)1点(約15g)/土坑4の堆積土から土師器(甕)126点(約1,541g)、須恵器(甕)2点(約

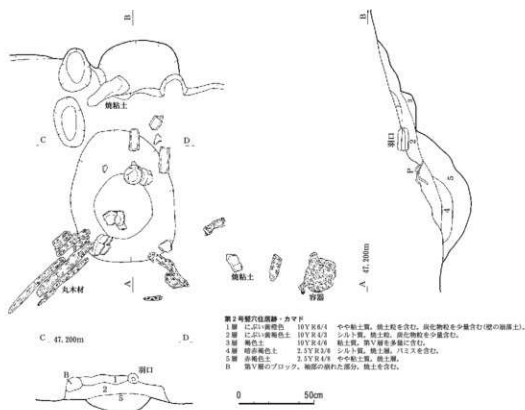


図18 第2号竪穴住居跡(4)

20g)、製塩土器19点(約400g) / 土坑5の堆積土から土師器(襷)15点(約274g)、製塩土器1点(約30g) / 土坑6の堆積土から土師器(襷)11点(約13g)、製塩土器3点(約50g) / 土坑7の堆積土から鉄滓3点(約155g) / 土坑10の堆積土から土師器(襷)101点(約2,330g)、須恵器(襷)3点(約40g)、製塩土器2点(約20g) / 土坑13の堆積土から土師器(襷)6点(約135g) / ビット4の堆積土から土師器(襷)1点(約25g) / ビット7の堆積土から土師器(襷)4点(約43g)、須恵器(襷)3点(約15g)、製塩土器1点(約23g) / ビット11の堆積土から土師器(襷)12点(約290g) / ビット12の堆積土から土師器(襷)1点(約12g)、製塩土器1点(約9g) / ビット13の堆積土から土師器(襷)6点(約21g) / 貼床から土師器(襷)43点(約561g)、須恵器(襷)

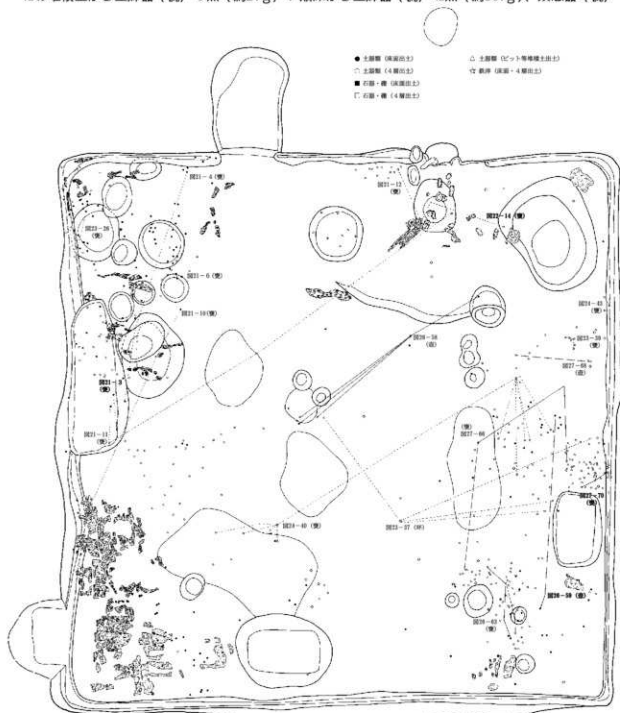


図19 第2号竪穴住居跡床面・4層出土遺物接合状態(1)

2点(約15g)、製塩土器1点(約10g)。

土師器の接合状態は、住居跡床面出土資料の接合2例(図21- 6・8) / 住居跡床面・住居跡堆積土4層出土資料の接合1例 / 住居跡床面・住居跡堆積土4・3層出土資料の接合1例(図21- 10) / 住居跡床面・住居跡堆積土4・3・2・1層出土資料の接合2例(図21- 3・11) / 住居跡床面・住居跡堆積土3層出土資料の接合2例(図21- 2・4) / 住居跡床面・ビット7堆積土出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土4層出土資料の接合2例(図23- 39・24- 43) / 住居跡堆積土4・3層出土資料の接合4例(図23- 37・24- 40他) / 住居跡堆積土4・2層出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土4・1層出土資料の接合1例(図23- 36) / 住居跡堆積土3層出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土3・2

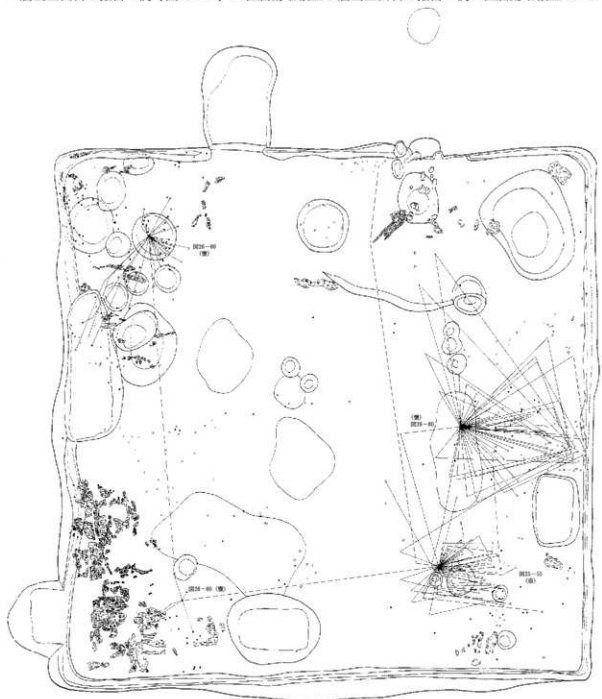


図20 第2号竪穴住居跡床面・4層出土遺物接合状態(2)

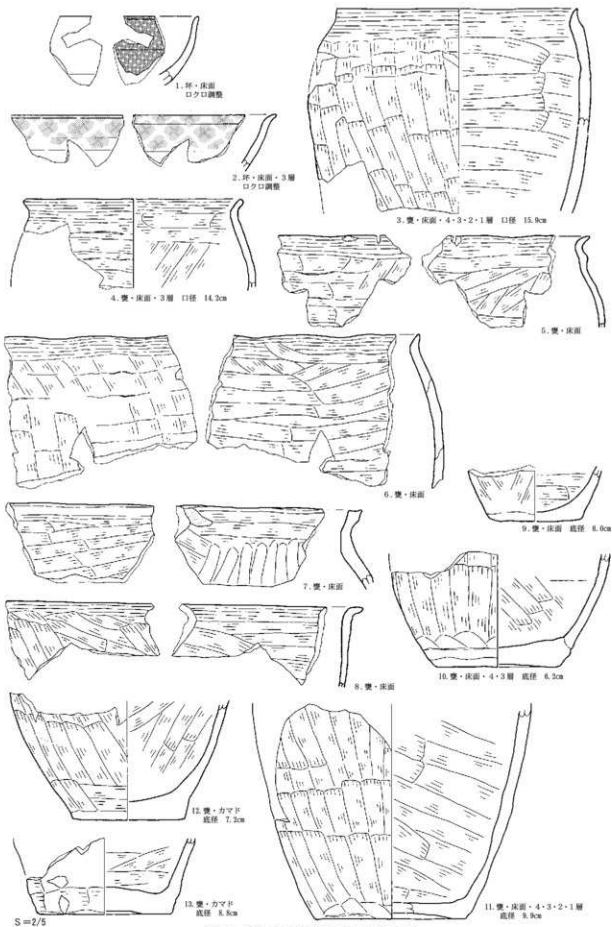


図21 第2号竪穴住居跡出土遺物(1)



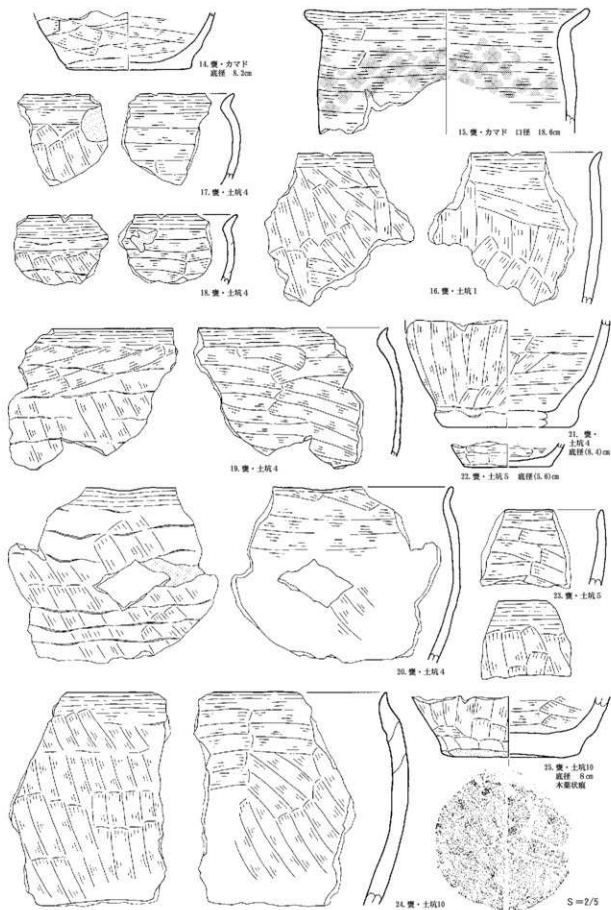


図22 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

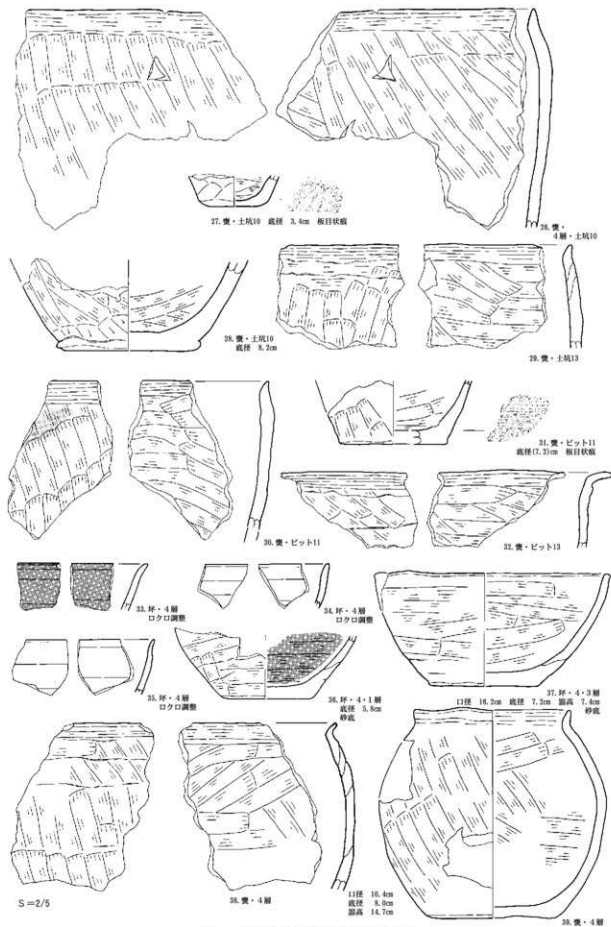


図23 第2号竪穴住居跡出土遺物(3)

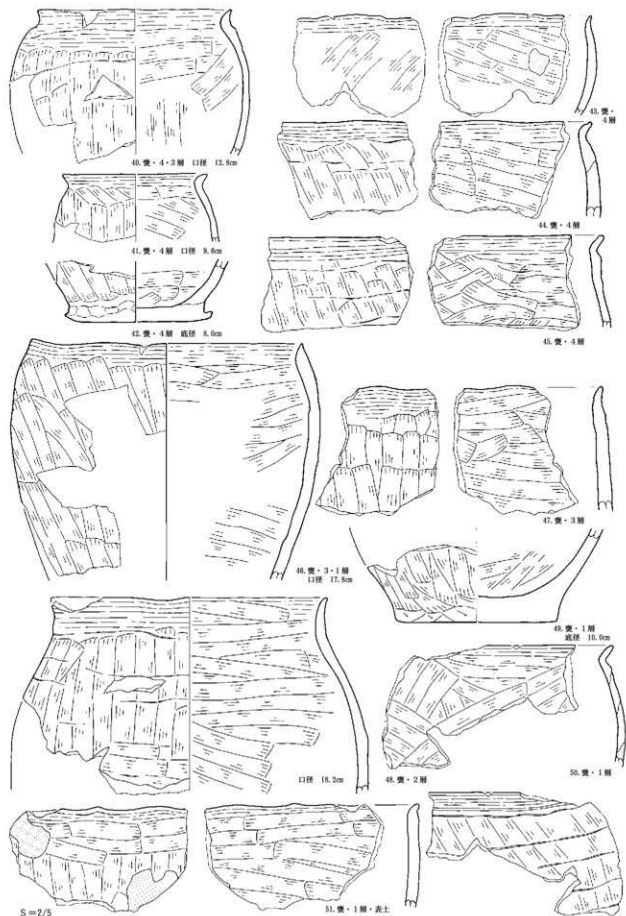


図24 第2号竪穴住居跡出土遺物(4)

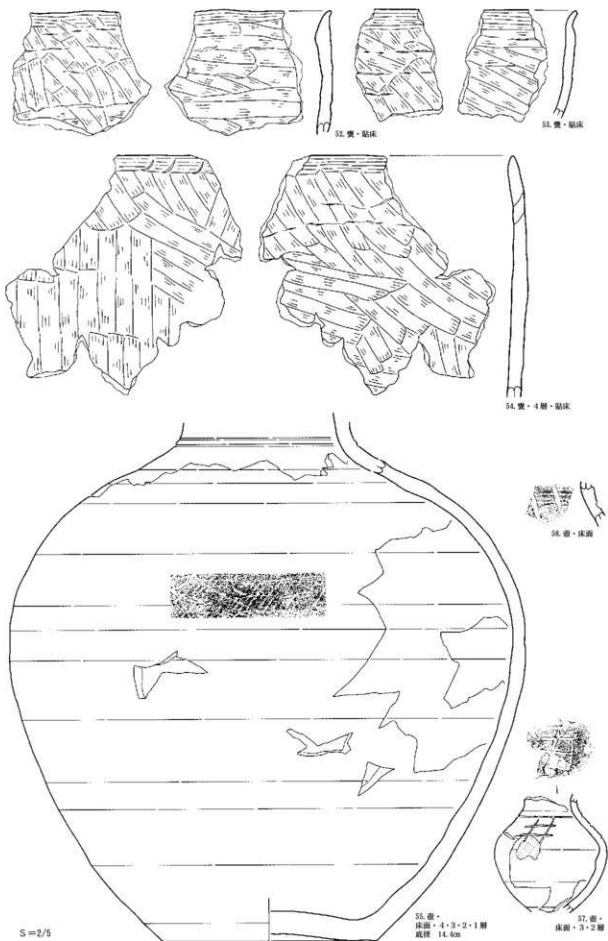


図25 第2号竪穴住居跡出土遺物(5)

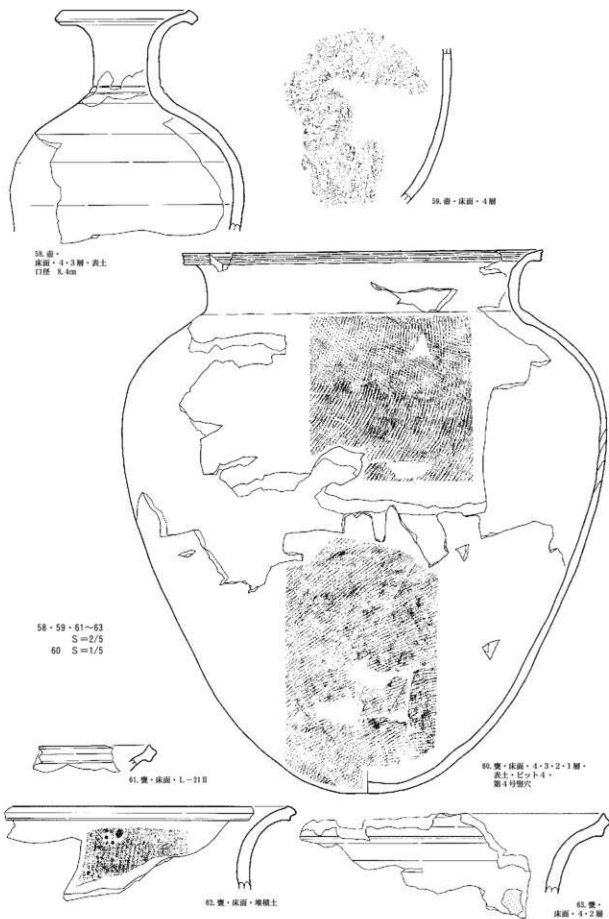


図26 第2号竪穴住居跡出土遺物(6)

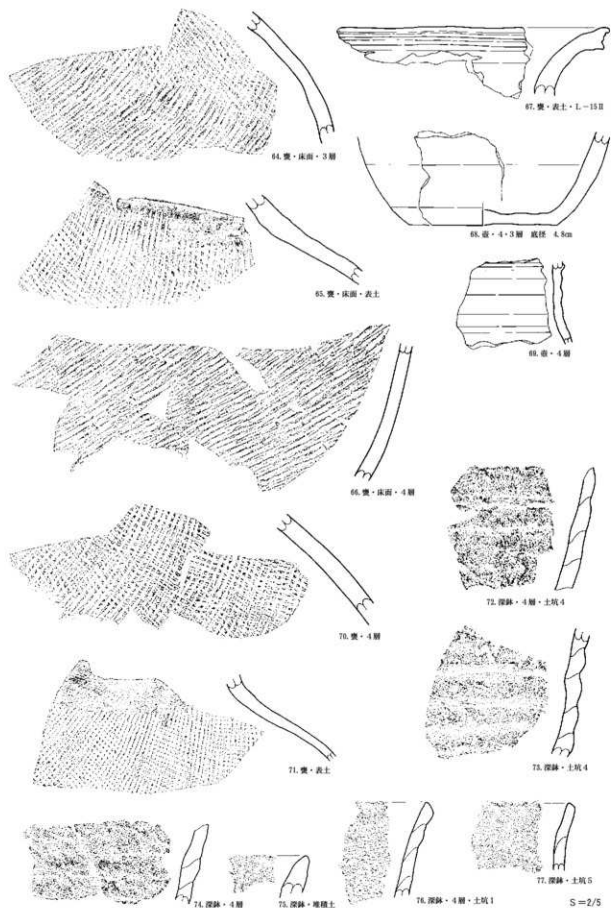


図27 第2号竪穴住居跡出土遺物(7)

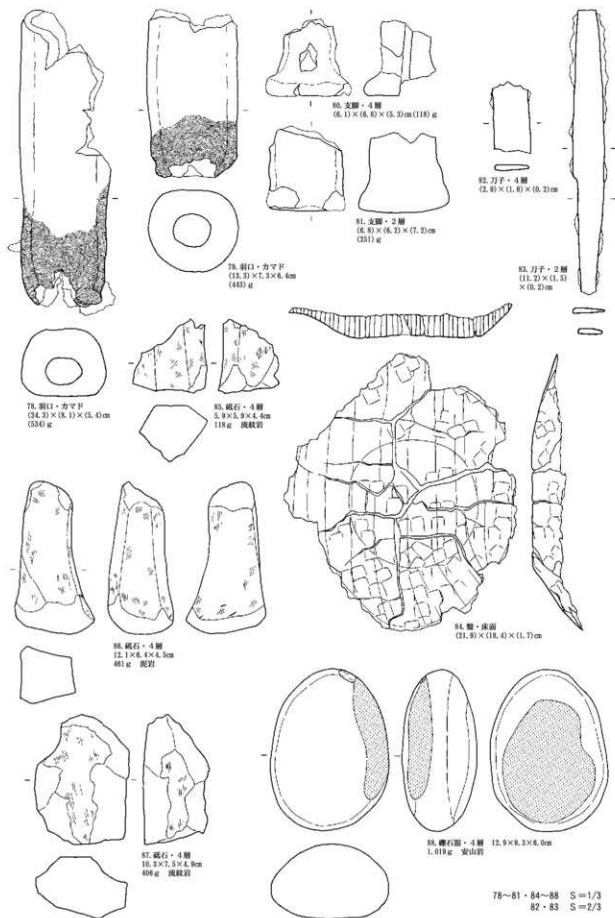


図28 第2号竪穴住居跡出土遺物(6)

層出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土3・1層出土資料の接合4例(図24-46他) / 住居跡堆積土4層・土坑10堆積土出土資料の接合2例(図23-26他) / 住居跡堆積土4層・貼床出土資料の接合1例(図25-54) / 住居跡堆積土1層・表土出土資料の接合1例(図24-51) / カマド堆積土出土資料の接合2例(図21-12・22-14) / 土坑1堆積土出土資料の接合1例(図22-16) / 土坑10堆積土・土坑13堆積土出土資料の接合1例。

須恵器の接合状態は、住居跡床面・住居跡堆積土4層出土資料の接合2例(図26-59・27-66) / 住居跡床面・住居跡堆積土4・3層・表土出土資料の接合1例(図26-58) / 住居跡床面・住居跡堆積土4・3・2・1層出土資料の接合1例(図25-55) / 住居跡床面・住居跡堆積土4・3・2・1層・表土・ビット4堆積土・第4号竪穴堆積土出土資料の接合1例(図26-60) / 住居跡床面・住居跡堆積土4・2層出土資料の接合1例(図26-63) / 住居跡床面・住居跡堆積土3層出土資料の接合1例(図27-64) / 住居跡床面・住居跡堆積土3・2層出土資料の接合1例(図25-57) / 住居跡床面・住居跡堆積土出土資料の接合1例(図26-62) / 住居跡床面・表土出土資料の接合1例(図27-65) / 住居跡床面・L-21グリッド出土資料の接合1例(図26-61) / 住居跡堆積土4層出土資料の接合1例(図27-70) / 住居跡堆積土4・3層出土資料の接合3例(図27-68他) / 住居跡堆積土4・2層出土資料の接合2例 / 住居跡堆積土4層・貼床出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土3・1層出土資料の接合1例。

製塩土器の接合状態は、住居跡堆積土4層・土坑4堆積土出土資料の接合1例(図27-72)。

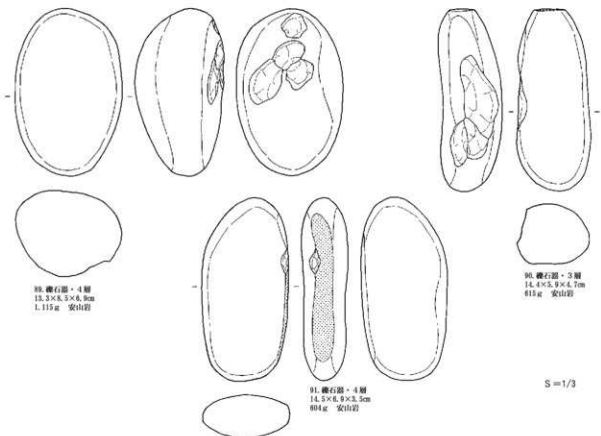


図29 第2号竪穴住居跡出土遺物⑨



## 第3号竪穴住居跡(図30-34、写真3・9)

【位置・確認】N-25、O・P-24・25、O-26グリッドに位置する。基本土層の第Ⅰ層(表土)を掘り下げた後、少し凹地となっていたことが分かったので、テストトレンチを設定して本遺構を検出した。平面形は、第Ⅱ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】平面形は、確認面、床面ともほぼ方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で4.43m、床面で4.34m、南東壁が確認面で4.36m、床面で4.17m、南西壁が確認面で4.19m、床面で4.15m、北西壁が確認面で4.47m、床面で4.36mである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んだ後、掘削した地山の土を利用して、全体に20～5cmの厚さで貼床をしている。確認面からの壁高は55～35cmで、壁面は全体として上部の崩れが目立ち、一部壁の傾斜がかなり緩くなっている。床面には大きな凹凸があり、全体として少し西に傾斜している。床面積は17.81㎡である。

【ビット等】床面及び貼床下で柱穴状の小ビットと土坑状のやや大きなビットを計9基(ビット1・2、土坑1～7)確認した。北・西隅で検出した小ビット(ビット1・2)は、本遺構の柱穴とみられるが、残りの東・南隅では検出されなかった。やや大きなビット(土坑1～7)は、床面の壁・隅寄りから多く検出され、貯蔵穴や廃棄穴の類とみられる。

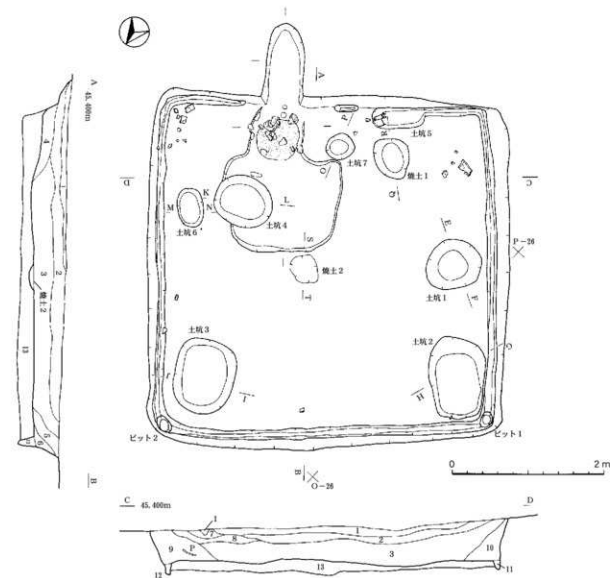
【付属施設】南東壁の中央から北東寄りに、半地下式のカマドが設置されている。カマドの主軸方位は、N-140°-Eである。カマドは遺存状態が悪く、煙道部と火床面等は確認されたが、カマド本体は全く残っていない。火床面上には、支脚として利用したとみられる土師器(甕)の底部が1片、伏せた状態で残っていた。火床面は57×55cmの大きさで、最大10cmほど掘り込まれている。また、カマドの火床面から床面の中央部にかけて、1.5×1.3mの不整な隅丸方形の段差があり、少し床面が低くなっている。この段差の北東側は、土坑4に切られており、段差の北東側と南西側には焼土(焼土1・2)が堆積していた。壁溝は、土坑5と重複する部分、カマドが設置された部分を除いて住居跡をほぼ全周する。壁溝の深さは、25～10cmである。

【堆積土】黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土(基本土層の第Ⅴ層)が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示している。

【出土遺物】土師器700点(約9,420g)(図31-33-1-19)、須恵器1点(第1号竪穴住居跡他出土資料に接合 図13-35)、羽口・支脚16点(約425g)(図34-20)等が出土した。

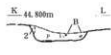
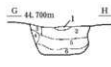
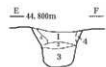
出土箇所の内訳は、住居跡の床面から土師器(甕)72点(約1,663g)、羽口・支脚16点(約425g) / 住居跡の堆積土から土師器(坏・甕)417点(約4,675g)、須恵器(壺)1点 / カマドの堆積土から土師器(甕)58点(約1,236g) / 土坑3の堆積土から土師器(甕)8点(約45g) / 土坑4の堆積土から土師器(甕)40点(約606g) / 焼土1の堆積土から土師器(甕)1点(約5g) / 貼床から土師器(甕)104点(約1,190g)。

土師器の接合状態は、住居跡床面・カマド堆積土出土資料の接合1例(図32-7) / 住居跡床面・土坑4堆積土出土資料の接合2例(図31-1他) / 住居跡堆積土・カマド堆積土出土資料の接合1点 / 住居跡堆積土・土坑1堆積土出土資料の接合1例(図33-17) / 住居跡堆積土・Q-28グリッド出土資料の接合1例(図33-15) / 住居跡堆積土・P-25グリッド出土資料の接合2例 / カマド堆積土出土資料の接合1例(図32-6) / 土坑4堆積土・貼床・R-24グリッド出土資料の接合1例(図32-8)。



第3号竈穴住居跡のピット等計量表

ピット	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)
ピット1	19	13	13
ピット2	15	15	15
土坑1	15	15	15
土坑2	17	17	17
土坑3	17	14	14
土坑4	17	17	17
土坑5	11	12	12
土坑6	18	13	13
土坑7	18	13	13
竈1	12	12	12
竈2	12	14	14



第3号竈穴住居跡

- 1層 褐色土
  - 2層 褐色粘土
  - 3層 褐色粘土
  - 4層 褐色粘土
  - 5層 褐色粘土
  - 6層 褐色粘土
  - 7層 褐色粘土
  - 8層 褐色土
  - 9層 褐色粘土
  - 10層 褐色粘土
  - 11層 褐色粘土
  - 12層 褐色土
  - 13層 明色褐色土
- 1層 褐色土 シルト層、地土層を露出させた。  
 2層 褐色粘土 褐色土とローム状の堆積層、焼土層、炭化植物を多数含む。  
 3層 褐色粘土 褐色土とローム状の堆積層、炭化植物を多数含む。  
 4層 褐色粘土 ローム状を多く含む。  
 5層 褐色粘土 同層の礫層上を含む。  
 6層 褐色粘土 同層の礫層上を含む。  
 7層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 8層 褐色土 同層の礫層上を含む。  
 9層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 10層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 11層 褐色粘土 ローム状を含む。  
 12層 褐色土 同層の礫層上を含む。  
 13層 明色褐色土 粘土層、礫層、礫層上部の礫層、褐色土とローム土、ローム状堆積層と土を含む。

第3号竈穴住居跡・土坑1

- 1層 褐色粘土
  - 2層 粘土・褐色粘土
  - 3層 褐色粘土
  - 4層 褐色土
- 1層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 2層 粘土・褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 3層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 4層 褐色土 ローム状を多数含む。

第3号竈穴住居跡・土坑2

- 1層 褐色粘土
  - 2層 粘土・褐色粘土
  - 3層 褐色土
  - 4層 褐色土
  - 5層 褐色土
  - 6層 褐色土
- 1層 褐色粘土 ローム状、ロームブロックを多数含む。  
 2層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 3層 粘土・褐色粘土 褐色土とローム状の堆積層。  
 4層 褐色土 ローム状を多数含む。  
 5層 褐色土 ローム状を多数含む、炭化植物を少量含む。  
 6層 褐色土 ローム状を多数含む。

第3号竈穴住居跡・土坑3

- 1層 褐色粘土
  - 2層 褐色粘土
  - 3層 粘土・褐色粘土
  - 4層 褐色土
- 1層 褐色粘土 ローム状を多数含む、パリスを露出させた、炭化植物を少量含む。  
 2層 褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 3層 粘土・褐色粘土 ローム状を多数含む。  
 4層 褐色土 褐色土とローム状の堆積層。

第3号竈穴住居跡・土坑4

- 1層 褐色粘土
  - 2層 粘土・褐色粘土
- 1層 褐色粘土 ロームブロックを少量含む、粘土層、炭化植物を含む。  
 2層 粘土・褐色粘土 ロームブロックを露出させた。

図30 第3号竈穴住居跡(1)



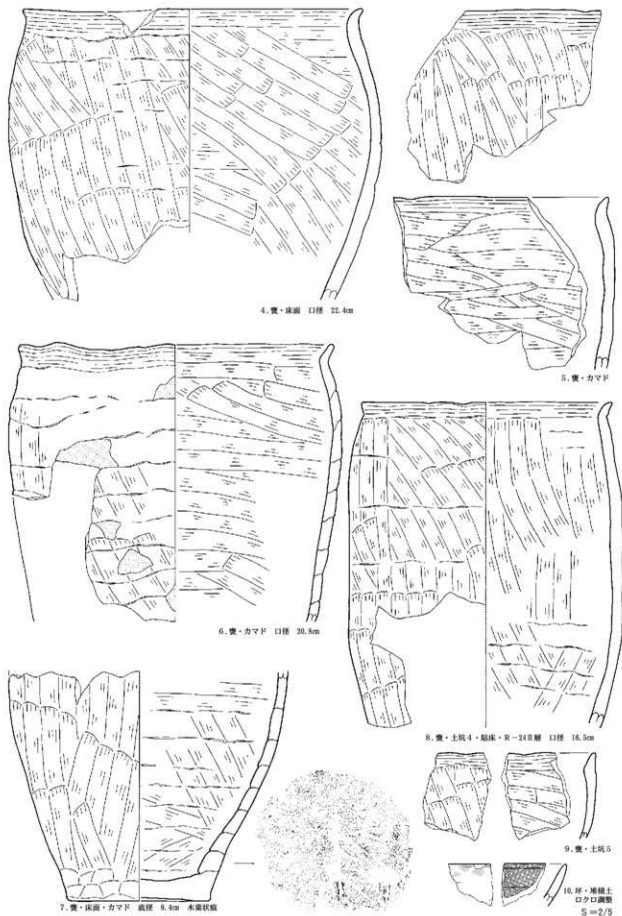


図32 第3号竪穴住居跡出土遺物(2)

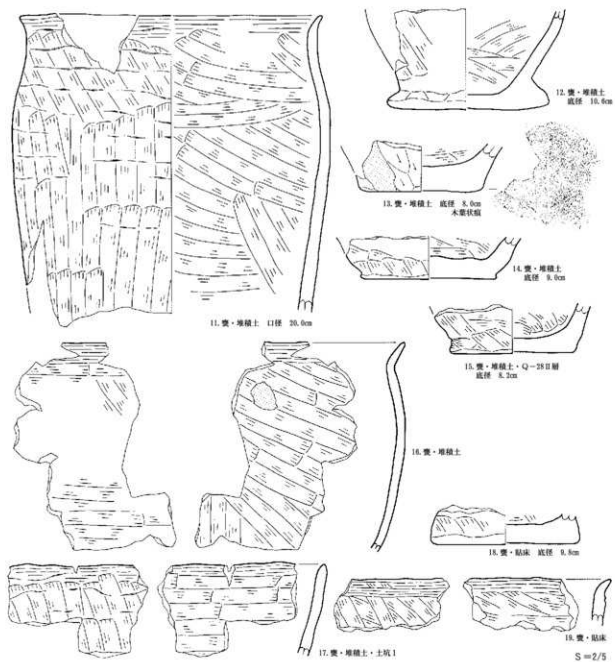
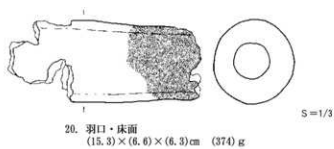


図33 第3号竪穴住居跡出土遺物(3)



20. 羽口・床面  
(15.3) × (6.6) × (6.3) cm (374) g

S=1/3

図34 第3号竪穴住居跡出土遺物(4)

## 第5号竪穴住居跡(図35-38、写真3・4・9)

【位置・確認】P・Q-21グリッドに位置する。基本土層の第Ⅱ層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】平面形は、確認面、床面とも不整な方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で2.81m、床面で2.67m、南東壁が確認面で2.56m、床面で2.45m、南西壁が確認面で2.93m、床面で2.83m、北西壁が確認面で2.50m、床面で2.43mである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んだ後、掘削した地山の土を利用して、全体に15～5cmの厚さで貼床をしている。確認面からの壁高は40～18cmで、壁面は全体的に崩落が目立ち、壁の傾斜がかなり緩くなっている部分もある。床面にはかなり凹凸があり、全体として少し南東に傾斜している。床面積は6.69㎡である。

【ビット等】床面及び貼床下で柱穴状の小ビットと土坑状のやや大きなビットを計8基(ビット1、土坑1～7)確認した。南隅で検出した小ビット(ビット1)は、本遺構の柱穴とみられるが、残りの3隅では検出されなかった。やや大きなビット(土坑1～5・7)は、床面の壁・隅寄りから多く検出され、貯蔵穴や廃棄穴の類とみられる。

【付属施設】南西壁の中央部に、半地下式のカマドが設置されている。カマドの主軸方位は、N-102°-Wである。カマドは遺存状態が悪く、煙道部と火床面等は確認されたが、カマド本体は全く残っていない。火床面は約90×80cmの大きさで、最大12cmほど掘り込まれている。火床面の北西側と南東側は、土坑6と土坑7に切られており、北東側には焼土(焼土1)が堆積していた。壁溝は検出されなかった。

【堆積土】黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土(基本土層の第Ⅴ層)が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示している。

【出土遺物】土師器249点(約4,715g)(図36-37-1-18)、須恵器2点(約105g)(図37-19)、羽口4点(約95g)(図38-22)、石器1点(図38-20)、鉄製品1点(図38-21)等が出土した。鉄製品は、刀と棒状の製品が折り重なって付着したものである。

出土箇所の内訳は、住居跡の床面から土師器(甕)22点(約410g)、須恵器(甕)1点(約75g) / 住居跡の堆積土から土師器(甕)139点(約2,250g)、須恵器(甕)1点(約30g)、羽口1点(約50g)、鉄製品(刀子)1点、 / カマドの堆積土から土師器(甕)44点(約1,352g)、羽口3点(約45g) / 土坑2の堆積土から土師器(甕)4点(約45g)、石器(砥石)1点 / 土坑3の堆積土から土師器(甕)4点(約220g) / 土坑4の堆積土から土師器(甕)20点(約275g) / 土坑5の堆積土から土師器(甕)9点(約110g) / 貼床から土師器(甕)7点(約53g)。

土師器の接合状態は、住居跡床面・住居跡堆積土出土資料の接合2例(図36-4・5) / 住居跡床面・住居跡堆積土・カマド堆積土出土資料の接合1例(図36-3) / 住居跡床面・住居跡堆積土・カマド堆積土・土坑5堆積土出土資料の接合1例(図36-1) / 住居跡床面・カマド堆積土出土資料の接合1例(図36-8) / 住居跡床面・土坑3堆積土出土資料の接合1例(図36-2) / 住居跡床面・土坑4堆積土出土資料の接合1例 / 住居跡堆積土出土資料の接合1例(図37-18) / 住居跡堆積土・カマド堆積土出土資料の接合3例(図37-11他) / 住居跡堆積土・カマド堆積土・土坑5堆積土出土資料の接合1例(図37-9) / カマド堆積土出土資料の接合1例 / 土坑4堆積土出土資料の接合1例



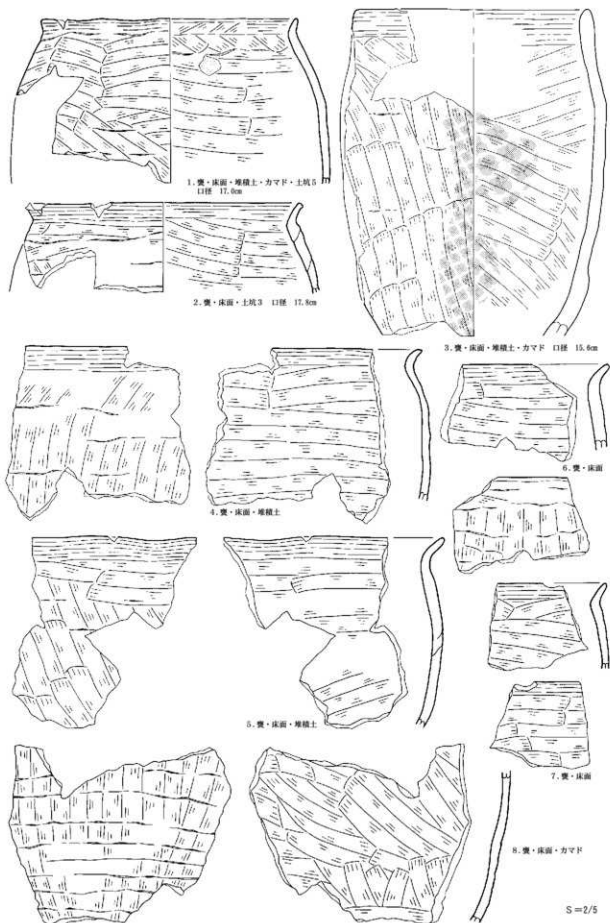


図36 第5号竪穴住居跡出土遺物(1)



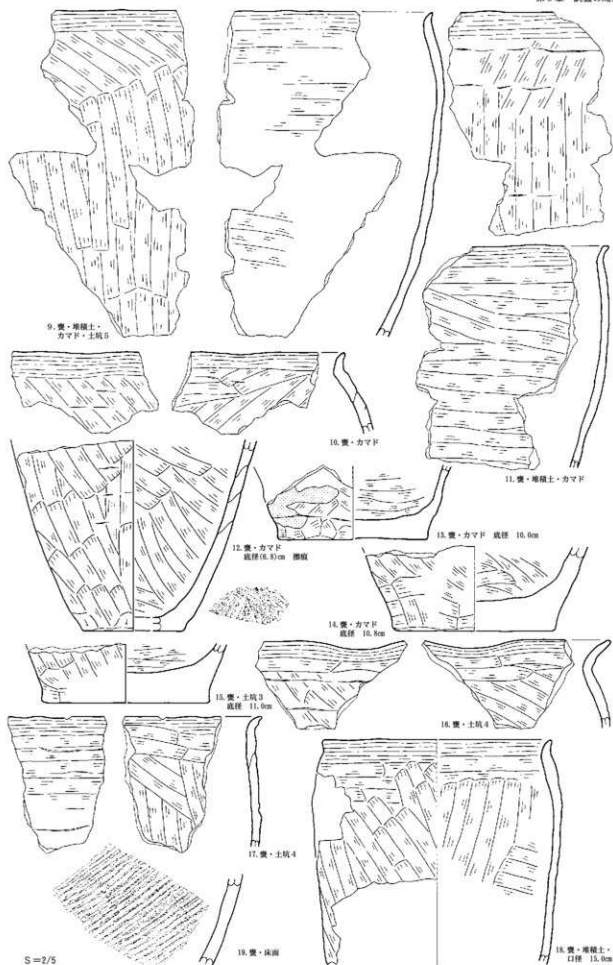


図37 第5号竪穴住居跡出土遺物(2)

／土坑4堆積土・第6号住居跡カマド堆積土出土資料の接合1例／土坑5堆積土・第1号竪穴堆積土出土資料の接合1例／住居跡堆積土・R-21グリッド出土資料の接合1例／住居跡堆積土・R-23グリッド出土資料の接合1例。

羽口の接合状態は、住居跡堆積土・第3号土坑堆積土出土資料の接合1例(図38-22)。

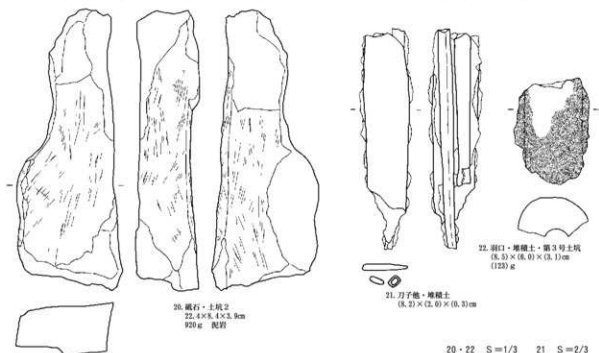


図38 第5号竪穴住居跡出土遺物(3)

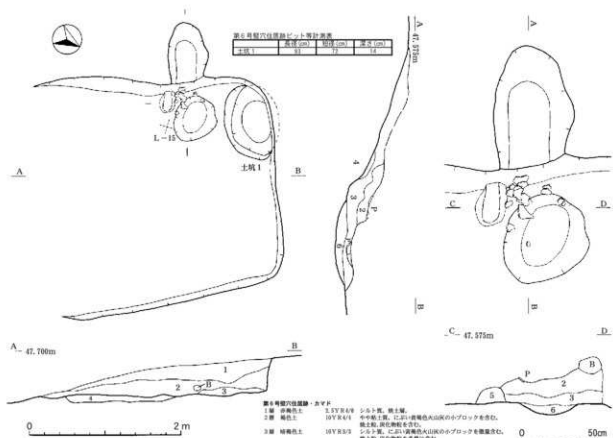
#### 第6号竪穴住居跡(図39、写真4・10)

【位置・確認】K・L-14・15、O-26グリッドに位置する。基本土層の第I層(表土)を掘り下げた後、焼土を検出しカマドであることが分かったので、さらに第IV層上面まで掘り下げ、にぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】調査対象区域北東側の急斜面の落ち際に作られており、北東側の壁は確認できなかった。平面形は、確認面、床面とも方形を呈しているが、北東側がかなり開く不整形な形になっている。壁長は、南東壁が床面で約3.00m、北西壁が床面で約2.90m、南西壁が確認面で2.43m、床面で2.40mである。基本土層の第V層まで掘り込んだ後、掘削した地山の土を利用して、中央部に10~5cmの厚さで貼床をしているが、壁寄りでは第V層を直接床面としている。確認面からの壁高は、遺存状態の良い南西壁側で45cmほどになっており、壁面は上部の崩落が目立ち、壁の傾斜が少し緩くなっている部分もある。床面には凹凸があり、全体として少し北東に傾斜している。残存する部分の床面積は約7.65㎡である。

【ビット等】床面で、土坑状のやや大きなビットを1個(土坑1)を確認した。内部が南西壁外に張り出す形態で、土師器片等がまとまって出土しており、貯蔵穴や廃棄穴の類とみられる。

【付属施設】南東壁の中央から南西寄りに、半地下式のカマドが設置されている。カマドの主軸方位は、N-162°-Eである。カマドは遺存状態が悪く、煙道部と火床面等は確認されたが、カマド本



- 第4号竪穴住居跡
- 1層 土砂・黄褐色土 10YR6/3 築込層、築り層を多量に含む。焼土粒、炭化物粒を含む。中央部中央部のブロックを含む。
  - 2層 粘褐色土 10YR5/3 シルト質、築り層、焼土粒、炭化物粒を含む。
  - 3層 土砂・黄褐色土 10YR6/4 シルト質、築込層、築り層を多量に含む。焼土粒、炭化物粒を少量含む。
  - 4層 黄褐色土 10YR6/5 粘土質、築り層を多量に含む。
  - 5層 黄褐色土(築り層)のブロック。

第6号竪穴住居跡・オマド

- 1層 赤褐色土 10YR5/6 シルト質、焼土層。
- 2層 褐色土 10YR5/4 中硬土層。土砂・黄褐色土山面のブロックを含む。焼土粒、炭化物粒を含む。
- 3層 粘褐色土 10Y5/3 シルト質。土砂・黄褐色土山面のブロックを多数含む。焼土粒、炭化物粒を多量に含む。
- 4層 粘褐色土 10YR5/3 粘土層。
- 5層 土砂・黄褐色土 10YR6/4 築り層。
- 6層 赤褐色土 10YR5/6 築り層を多量に含む。
- 7 土砂・黄褐色土(築り層)のブロック。

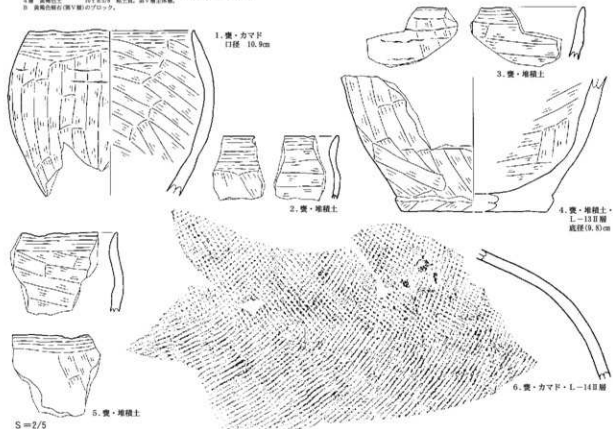


図39 第6号竪穴住居跡・出土遺物

体は左袖部の一部を除いてほとんど残っていない。袖部は、にぶい黄褐色粘土で構築されている。火床面は58×56cmの大きさで、最大8cmほど掘り込まれている。壁溝は検出されなかった。

【堆積土】 にぶい黄褐色土と暗褐色土を主体とし、堆積土の上部に白頭山起源の苫小牧火山灰の小ブロックが混入している。

【出土遺物】 土師器77点（約1,175g）（図39- 1～5）、須恵器7点（約430g）（図39- 6）等が出土した。

出土箇所の内訳は、住居跡の堆積土から土師器（甕）48点（約740g）/カマドの堆積土から土師器（甕）22点（約365g）、須恵器（甕）7点（約430g）/土坑1の堆積土から土師器（甕）7点（約70g）。

土師器の接合状態は、住居跡堆積土・土坑1堆積土出土資料の接合1例/カマド堆積土出土資料の接合1例（図39- 1）/住居跡堆積土・L-13グリッド出土資料の接合1例（図39- 4）。

須恵器の接合状態は、カマド堆積土・L-14グリッド出土資料の接合1例（図39- 6）。

## 2 竪穴遺構

発掘作業時には、1基の遺構（略号S X01）を竪穴遺構として精査したが、竪穴住居跡として精査した遺構の中の1基（略号S I04）はカマドを伴わないことが分かったので、整理作業ではこの遺構を竪穴遺構に含めた。発掘作業時の略号に基づいて、第1・4号竪穴遺構（略号S X01・SI04）として報告するため、第2・3号竪穴遺構は欠番となる。

第1号竪穴遺構（図40、写真4・10）

【位置・確認】 P-21、P-Q-22・23グリッドに位置する。基本土層の第Ⅱ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】 平面形は、確認面、底面ともほぼ方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で3.50m、底面で3.30m、南東壁が確認面で3.64m、底面で3.42m、南西壁が確認面で3.76m、底面で3.60m、北西壁が確認面で3.82m、底面で3.56mである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んだ後、同層を直接底面としている。確認面からの壁高は35～20cmで、壁面は全体的に上部の崩落が目立ち、壁の傾斜がかなり緩くなっている部分もある。底面には緩い凹凸があり、全体として少し南に傾斜している。底面積は12.36㎡である。

【ビット等】 底面で土坑状のやや大きなビットを2基（土坑1・2）確認した。底面の南東側で検出したビット（土坑1）は、かなり長目の長方形で南東側がさらに一段深くなっている。南西壁寄りで見出したビット（土坑2）は、ほぼ円形に掘り込まれている。

【付属施設】 付属施設等は検出されなかった。

【堆積土】 黒褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示している。

【出土遺物】 土師器28点（約460g）（図40- 1・2）、鉄滓1点（約32g）等が出土した。

出土箇所の内訳は、竪穴の底面から土師器（甕）1点（約9g）/竪穴の堆積土から土師器（甕）20点（約359g）、鉄滓1点（約32g）/土坑1の底面から土師器（甕）1点（約9g）/土坑1の堆積土から土師器（甕）5点（約80g）/土坑2の堆積土から土師器（甕）1点（約3g）。

土師器の接合状態は、竪穴堆積土・R-23グリッド出土資料の接合1例（図40- 1）。

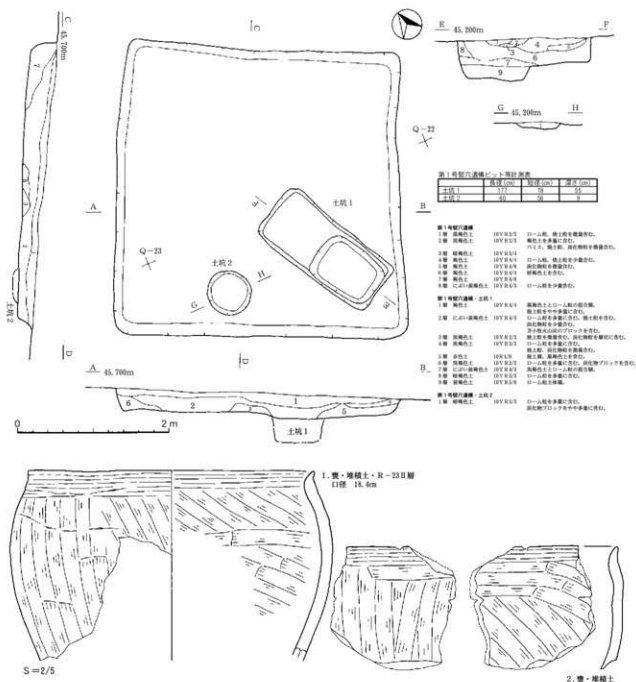


図40 第1号竪穴遺構・出土遺物

第4号竪穴遺構 (図41、写真4・10)

【位置・確認】 P-16、O・P-17グリッドに位置する。基本土層の第IV層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】 調査対象区域南東側の急斜面の落ち際に作られているため、南東側の壁は立ち上がりを十分確認できなかった。平面形は、確認面、底面ともかなり不整な長方形となっている。壁長は、北東壁が確認面で2.34m、底面で2.20m、南東壁が確認面で2.84m、底面で2.77m、南西壁が確認面

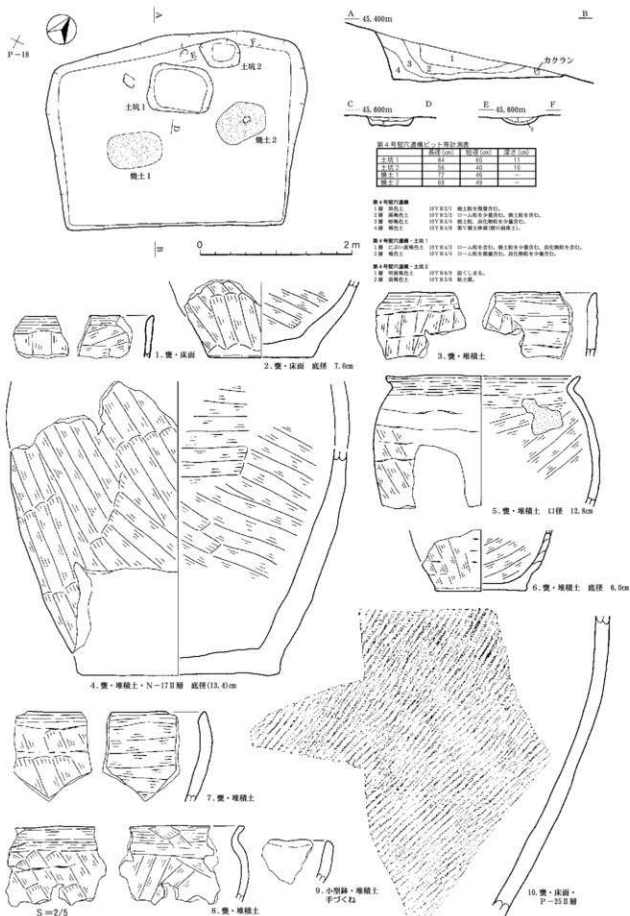


図41 第4号竪穴遺構・出土遺物

で2.10m、底面で1.94m、北西壁が確認面で3.15m、底面で2.98mである。基本土層の第V層まで掘り込んだ後、同層を直接底面としている。確認面からの壁高は、遺存状態の良い北西壁側で65cmほどになっており、壁面は上部の崩落が目立ち、壁の傾斜がかなり緩くなっている部分もある。底面には凹凸があり、全体として少し北西に傾斜している。底面積は6.29㎡である。

〔ビット等〕底面の北西壁寄り、土坑状のやや大きなビットを2基（土坑1・2）確認した。北西壁中央部近くで検出したビット（土坑1）は隅丸の長方形、北西壁に接して検出したビット（土坑2）は不整形に掘り込まれているが、いずれも掘り込みはかなり浅い。

〔付属施設〕付属施設等は検出されなかったが、底面中央から少し南寄りと北東寄りの2箇所に、薄い焼土（焼土1・2）が堆積していた。

〔堆積土〕黒色土と黒褐色土、暗褐色土を主体とし、壁寄りに地山の土（基本土層の第V層）が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕土師器125点（約2,042g）（図41- 1～9）、須恵器3点（約379g）（図41- 10）等が出土した。

出土箇所の内訳は、竪穴の底面から土師器（甕）4点（約115g）、須恵器（甕）2点（約370g）/竪穴の堆積土から土師器（坏・甕・小型鉢）121点（約1,927g）、須恵器（甕）1点（約9g）。

土師器の接合状態は、竪穴底面出土資料の接合1例（図41- 2）/竪穴堆積土出土資料の接合1例（図41- 5）/竪穴堆積土・N-17グリッド出土資料の接合1例（図41- 4）。

須恵器の接合状態は、竪穴底面・P-25グリッド出土資料の接合1例（図41- 10）。

### 3 土坑

発掘作業時には、11基の遺構（略号SK01～11）を土坑として精査したが、精査の結果、この中の3基（略号SK04・05・10）は自然の落ち込み等と判断されたので、整理作業ではこれらを遺構から除いた。土坑として整理作業を行った8基については、発掘作業時の略号に基づいて、第1～3・6～9・11号土坑（略号SK01～03・06～09・11）として報告する。第4・5・10号土坑は欠番とした。第1号土坑（図42、写真4・10）

〔位置・確認〕O-26・27グリッドに位置する。基本土層の第IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕平面形は、確認面、底面とも不整な隅丸の長方形となっている。長辺は、確認面で約2.3m、底面で約2.0m、短辺は、確認面で約2.1m、底面で約1.6mである。基本土層の第V層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、90～80cmである。壁面の上部は崩落が目立ち、部分的に壁の傾斜が緩くなっている。底面には大きな凹凸があり、全体として少し南西に傾斜している。底面積は3.13㎡である。

〔堆積土〕黒色土と黒褐色土を主体とし、壁寄り～底面に地山の土（主に基本土層の第IV・V層）が多く含まれている。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるものとみられ、堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕土師器点80（約1,356g）（図42- 1～6）、須恵器3点（約145g）（図42- 7）等が出土した。

出土箇所の内訳は、土坑の底面から土師器（坏・甕）8点（約125g）、須恵器（壺）3点（約145g）/土坑の堆積土から土師器（甕）72点（約1,231g）。

土師器の接合状態は、土坑堆積土出土資料の接合1例（図42-3）。

須恵器の接合状態は、土坑堆積土・P-15グリッド出土資料の接合1例（図42-7）。

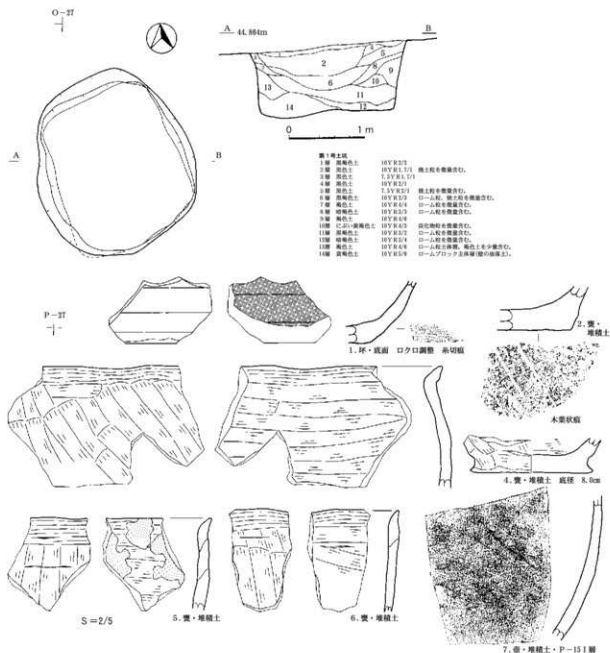


図42 第1号土坑・出土遺物

第2号土坑（図43・44、写真4・10・11）

【位置・確認】 P-16・17グリッドに位置する。基本土層の第V層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。



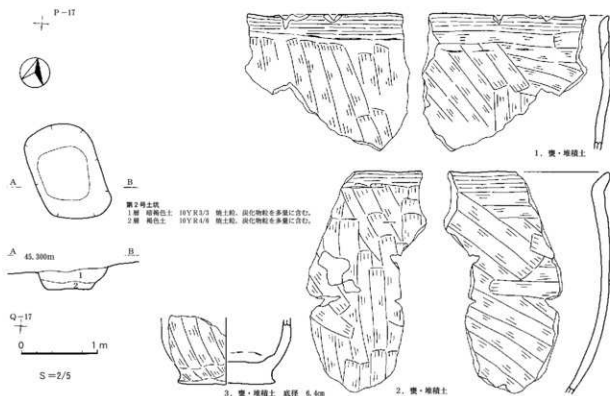


図43 第2号土坑・出土遺物1)

【形態・規模】平面形は、確認面、底面ともかなり不整な隅丸の長方形となっている。長辺は、確認面で約1.3m、底面で約0.7m、短辺は、確認面で約0.9m、底面で約0.6mである。基本土層の第V層を掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は30～25cmである。壁面は上部は崩れて、全体的に壁の傾斜が緩くなっている。底面には少し凹凸があり、全体としてやや北東に傾斜している。底面積は0.40㎡である。

【堆積土】上部が暗褐色土、下部が褐色土を主体とし、炭化物、焼土を多量に含んでいる。

【出土遺物】土坑の堆積土から、土師器（椀）100点（約1,279g）（図43- 1～3）、製塩土器1点（約270g）、支脚1点（約265g）（図44- 4）、鉄滓11点（約486g）、貝殻（イガイ）9点等が出土した。貝殻は、すべて表側が上になっていた。

土師器の接合状態は、土坑堆積土出土資料の接合4例（図43- 1・2他）/土坑堆積土・P-16・17グリッド出土資料の接合1例。



図44 第2号土坑出土遺物2)

## 第3号土坑（図45・46、写真4・10）

【位置・確認】P-20グリッドに位置する。基本土層の第V層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】平面形は、確認面、底面とも少し不整な円形となっている。直径は、確認面で約0.9m、底面で約0.7mである。基本土層の第V層を掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの

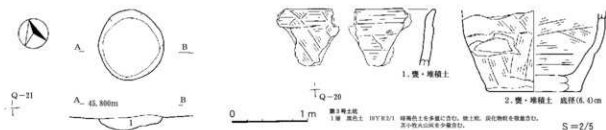


図45 第3号土坑・出土遺物(1)

壁高は、20～10cmである。壁は傾斜が緩く、不明瞭な掘り込みになっている。底面にはかなり凹凸があり、全体として西に傾斜している。底面積は0.43㎡である。

【堆積土】 黒色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

【出土遺物】 土坑の堆積土から、土師器（椀）12点（約94g）（図45-1・2）、羽口・支脚46点（約833g）（図46-3）、鉄滓4点（約396g）等が出土した。

羽口の接合状態は、土坑堆積土・Q-19グリッド出土資料の接合1例（図46-3）。



3. 羽口・支脚土  
Q-19グリッド  
(11.8) × (7.0)  
× (5.1)cm  
(231)g

S=1/3

第6号土坑（図47、写真5）

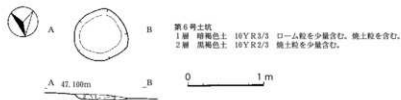
図46 第3号土坑・出土遺物(2)

【位置・確認】 N-19グリッドに位置する。基本土層の第V層上面で暗褐色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】 平面形は、確認面、底面とも少し不整な円形となっている。直径は、確認面で約0.7m、底面で約0.5mである。基本土層の第V層を掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、10cm以下である。掘り込みが不明瞭で、壁の立ち上がりもはっきりしない。底面には凹凸があり、全体としてやや西に傾斜している。底面積は0.21㎡である。

【堆積土】 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、焼土を少し含んでいる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。



第6号土坑  
1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒を少量含む、焼土粒を含む。  
2層 黒褐色土 10YR2/3 焼土粒を少量含む。

図47 第6号土坑

## 第7号土坑 (図48-49、写真5・10)

【位置・確認】 K・L-18・19グリッドに位置する。基本土層の第IV層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】 平面形は、確認面、底面とも不整な少し隅丸の長方形となっている。長辺は、確認面で約2.5m、底面で約2.2m、短辺は、確認面で約2.0m、底面で約1.8mである。基本土層の第V層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、80cmほどである。壁面は部分的に上部の崩落が目立ち、一部壁の傾斜が緩くなっている。底面には緩い凹凸があり、全体として少し南西に傾斜している。底面積は3.37㎡である。

【堆積土】 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、底面近くと堆積土中程に地山の土（主に基本土層の第IV・V層）が多く含まれている。全体的に地山の土はかなり多量に含まれており、堆積土は人為的に埋められた状態とみられる。

【出土遺物】 土坑の堆積土から、土師器（甕）111点（約2,115g）（図48-1～4）、須恵器（壺・甕）7点（約475g）（図48-5・6）、支脚4点（約335g）（図49-7）、鉄製品（環状等）2点（図49-8・9）、鉄滓3点（約53g）等が出土した。

須恵器の接合状態は、土坑堆積土・L-24・P-18グリッド出土資料の接合1例（図48-5）/土坑堆積土・J-16グリッド出土資料の接合1例。

## 第8号土坑 (図50、写真5・10)

【位置・確認】 R・S-26グリッドに位置する。基本土層の第V層上面で黒褐色土と暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【形態・規模】 平面形は、確認面、底面とも少し不整な長方形となっている。直辺は、確認面で約1.4m、底面で約1.1m、短辺は、確認面で約0.8m、底面で約0.6mである。基本土層の第V層を掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、25～20cmである。壁面は部分的に上部の崩落が目立ち、一部壁の傾斜が緩くなっている。底面はほぼ平坦で、底面積は0.67㎡である。

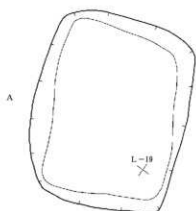
【堆積土】 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄りと堆積土中程に地山の土（主に基本土層の第V層）が多く含まれている。また、堆積土中に白頭山起源の苫小牧火山灰が少量混入している。

【出土遺物】 土坑の堆積土から、土師器（甕）19点（約150g）（図50-1）等が出土した。

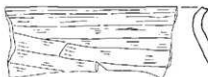
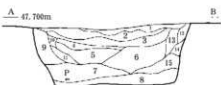
## 第9号土坑 (図51、写真5)

【位置・確認】 V-37グリッドに位置する。基本土層の第VI層上面で黒褐色土と褐色土の落ち込みとして確認した。

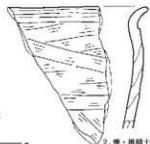
【形態・規模】 平面形は、確認面、底面ともかなり不整な楕円形となっている。長径は、確認面で約1.4m、底面で約1.1m、短径は、確認面で約1.1m、底面で約0.8mである。基本土層の第VII層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、70cmほどである。壁面は全体的に崩落が著しく、壁の傾斜が緩くなっている。底面は中央部が凹み、全体として西に傾斜している。底面積は0.69㎡である。



- 第7号土坑**
- |             |          |                                   |
|-------------|----------|-----------------------------------|
| 1層 深褐色土     | 10Y R2/2 | シルト質、焼土粒を多く含む。                    |
| 2層 深褐色土     | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む。                     |
| 3層 暗褐色土     | 10Y R2/4 | ローム粒を多量に含む、炭化物粒を散見含む。             |
| 4層 灰色(黄)褐色土 | 10Y R4/3 | ローム粒、ロームブロックを多量に含む。               |
| 5層 褐色土      | 10Y R3/4 | ロームブロック、焼土粒を多量に含む。                |
| 6層 灰色(黄)褐色土 | 10Y R4/3 | ローム粒、ロームブロックを多量に含む、焼土粒、炭化物粒を散見含む。 |
| 7層 深褐色土     | 10Y R2/2 | ローム粒を多量に含む、焼土ブロック、炭化物粒を散見含む。      |
| 8層 褐色土      | 10Y R3/4 | ローム粒を多量に含む、炭化物粒を散見含む。             |
| 9層 深褐色土     | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む。                     |
| 10層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を多量に含む。                       |
| 11層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む、焼土粒を散見含む。            |
| 12層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む。                     |
| 13層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を多量に含む。                       |
| 14層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む、焼土粒を散見含む。            |
| 15層 深褐色土    | 10Y R2/2 | ローム粒を中々多量に含む、焼土粒、炭化物粒を含む。         |



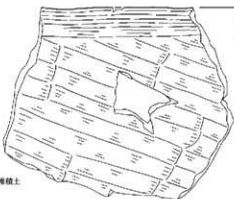
1. 甕・埴輪土



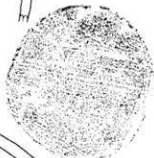
2. 甕・埴輪土



3. 甕・埴輪土



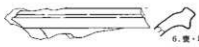
4. 甕・埴輪土  
口径 10.4cm  
笠形伏輪



5. 甕・埴輪土・L-24日層・P-18日層



S=2/5



6. 甕・埴輪土

図48 第7号土坑・出土遺物(1)

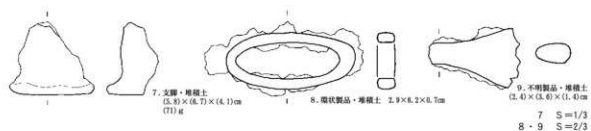


図49 第7号土坑出土遺物(2)



図50 第8号土坑・出土遺物

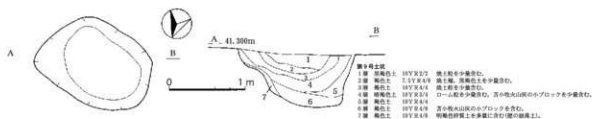


図51 第9号土坑

【埴積土】黒褐色土と暗褐色土を主体とし、壁寄り～底面近くと埴積土中程に地山の土（主に基本土層の第Ⅵ・Ⅶ層）が多く含まれている。また、埴積土下部に白頭山起源の苫小牧火山灰がブロック状に混入し、埴積土上部には焼土層がみられる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

#### 第11号土坑（図52、写真5）

【位置・確認】H-19・20グリッドに位置する。第2号竪穴住居跡を精査中に、北隅寄りの北東壁面で黒褐色土とにぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複関係】本遺構の南西側と第2号竪穴住居跡の北東壁側が重複し、第2号竪穴住居跡が本遺構の南西側を切っている。

【形態・規模】北東側が半分ほど遺存しており、平面形は、確認面が楕円形、底面が方形を呈しているが、確認面の形態は壁面の崩落によるものと思われる。短径（短辺）は、確認面で1.3m、底面で1.0mほどになる。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は約60cmで、壁面はかなり崩れて壁の傾斜が緩くなっている。底面は中央部が少し凹んでおり、残存する底面積は約0.50㎡である。

〔堆積土〕 黒色土と黒褐色土、暗褐色土を主体とし、壁～底面近くと堆積土中程に地山の土（主に基本土層の第Ⅴ層）が多く含まれている。また、堆積土中程に白頭山起源の苫小牧火山灰が混入している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

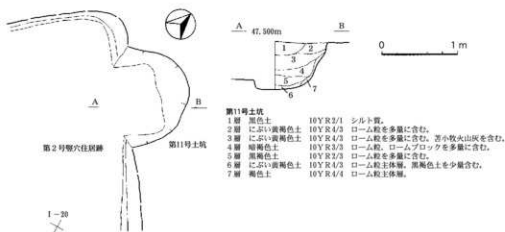


図52 第11号土坑

#### 4 溝状土坑

発掘作業時に、溝状土坑として精査した1基の遺構（略号SV01）を第1号溝状土坑として報告する。第1号溝状土坑（図53、写真5）

〔位置・確認〕 W-32・33グリッドに位置する。基本土層の第Ⅴ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕 平面形は、確認面、底面とも直線的な短い溝状の形になっている。長さは、確認面で約2.8m、底面で約2.9m、最大幅は、確認面で約0.5m、底面で約0.2mである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの壁高は、60cmほどである。壁面には部分的に崩落がみられ、東側は特に壁の上部が開いている。また、東端部では壁の下部が外側に張り出している。底面には凹凸があり、全体として少し西に傾斜している。底面積は0.61㎡である。

〔堆積土〕 黒色土と黒褐色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

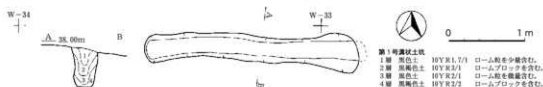


図53 第1号溝状土坑

## 5 溝跡

発掘作業時に、溝跡として精査した3条の遺構（略号SD01-03）を第1～3号溝跡として報告する。

## 第1号溝跡（図54）

〔位置・確認〕大略J～P-20-25グリッドの範囲に位置する。基本土層の第Ⅱ～Ⅴ層上面で暗褐色土等の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕全体的には北西-南東方向へ直線的に延びる形で、北西側は調査対象区域外になるため未調査である。溝跡は断続的に続いており、部分的には少し長目の柱穴状ピットの形態になる箇所も少なくない。また、溝跡底面から柱穴状の小ピットが検出された箇所もある。調査した部分の長さは約31.0m、最大幅は確認面で約40cm、底面で約20cmほどである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの深さは、約25～5cmほどである。底面には凹凸がみられ、北西側では全体として南東に傾斜している。

〔堆積土〕暗褐色土等を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

## 第2号溝跡（図54、写真5）

〔位置・確認〕大略O～S-17-28グリッドの範囲に位置する。基本土層の第Ⅱ～Ⅴ層上面で黒色土や黒褐色土等の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕全体的にはL字形に延びる形となっており、S-25グリッド付近を境として、北東-南西方向に延びる部分の長さは約38.0m、北西-南東方向に延びる部分の長さは約18.0m、全長は約56.0mである。溝跡は断続的に続き、部分的には少し長目の柱穴状ピットの形態になる箇所もあり、溝跡底面から柱穴状の小ピットが検出された箇所もある。最大幅は確認面で約40cm、底面で約20cmほどである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの深さは、約36～3cmほどである。底面には凹凸がみられ、北東-南西方向に延びる部分では全体として南西に傾斜している。

〔堆積土〕暗褐色土等を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

〔出土遺物〕溝跡の堆積土から、土師器（椀）4点（約63g）（図54-1）等が出土した。

## 第3号溝跡（図54）

〔位置・確認〕大略K～M-26・27グリッドの範囲に位置する。基本土層の第Ⅱ～Ⅴ層上面で暗褐色土等の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕全体的には北東-南西方向へ直線的に延びる形だが、北東側は調査対象区域外になるため未調査である。溝跡は断続的に続いており、部分的には少し長目の柱穴状ピットの形態になる箇所もある。調査した部分の長さは約6.0m、最大幅は確認面で約30cm、底面で約20cmほどである。基本土層の第Ⅴ層まで掘り込んで、同層を底面としている。確認面からの深さは、約21～3cmほどである。底面には凹凸がみられ、全体として南西に傾斜している。

〔堆積土〕暗褐色土等を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

## 6 柱穴状ピット群

発掘作業時に、柱穴状ピットとして精査した34基の遺構（ピット1～34）を柱穴状ピット群として報告する。略号は使用しなかった。

柱穴状ピット群（図54、写真5）

[位置・確認] 大略J-P-22・25グリッドの範囲に位置する。北西-南東方向に延びる第1号溝跡の北東側から7基、南西側から27基検出した。基本土層の第Ⅱ～Ⅴ層上面で暗褐色土等の落ち込みとして確認した。

[形態・規模] ピット1・2-ピット3-ピット6・7-ピット5-ピット4の7基が約2.5m前後の間隔で方形に配置されているが、北隅では検出されなかった。また、ピット9-ピット10-ピット11-ピット13-ピット14-ピット15-ピット16-ピット17-ピット18の9基が約2.0m前後の間隔で方形に配置されており、ピット8やピット12がこれに伴うことも考えられる。ピット19-ピット20-ピット21-ピット22-ピット33-ピット24の6基も約2.5m前後の間隔で方形に配置されているが、ピット23-ピット27-ピット25の配置とはズレがあって南隅側が不明となっている。

[堆積土] 暗褐色土等を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

## 7 焼土

発掘作業時に、焼土として精査した4基の遺構（略号SN01～04）を第1～4号焼土として報告する。第1号焼土（図55）

[位置・確認] O-23グリッドに位置する。基本土層の第Ⅳ層上面で確認した。

[形態・規模] 約50×40cmの不整な楕円形の範囲に、薄い焼土層が堆積している。掘り込み等は不明瞭である。

[堆積土] 焼土層下には暗褐色土が堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第2号焼土（図55）

[位置・確認] O-23グリッドに位置する。基本土層の第Ⅳ層上面で確認した。

[形態・規模] 約60×40cmの不整な楕円形の範囲に、薄い焼土層が堆積している。掘り込み等は不明瞭である。

[堆積土] 焼土層下には暗褐色土が堆積している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



図55 第1・2号焼土



## 第3号焼土 (図56)

〔位置・確認〕 P-23グリッドに位置する。基本土層の第Ⅲ層上面で確認した。

〔形態・規模〕 約30×30cmの不整な円形の範囲に、薄い焼土層が堆積している。掘り込み等は不明瞭である。焼土層の周囲には、約1.6×1.4mの範囲に炭化物や焼土粒が広がっていた。

〔堆積土〕 焼土層の周りには暗褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

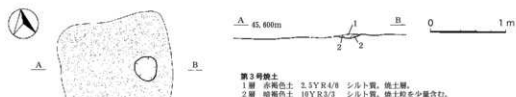


図56 第3号焼土

## 第4号焼土 (図57)

〔位置・確認〕 R-27グリッドに位置する。基本土層の第Ⅲ層上面で確認した。

〔形態・規模〕 約40×40cmの不整な円形の範囲に、希薄な焼土層が堆積している。掘り込み等は不明瞭である。

〔堆積土〕 焼土層は暗褐色土を主体としている。

〔出土遺物〕 すべて焼土堆積土から、土師器(甕)11点(約125g)等が出土した。



図57 第4号焼土

## 第2節 遺構外出土遺物

遺構外から、土師器、須臾器、製塩土器、縄文・弥生土器、土製品、石器、鉄製品等が出土した。

## 1 土師器 (図58-60- 1~32、写真10・11)

竪穴住居跡が分布する丘陵地の平場から斜面上部にかけて、坏・甕・小型鉢等が7,005点(77,435g)出土した。第1・3号竪穴住居跡周辺から比較的多く出土しているが、全体的には、平場一帯に散在するような出土状態である。同一グリッド内での接合以外の接合状態は、O-25・P-25グリッド出土資料の接合1例(図60-26)、Q-26・27出土資料の接合2例である。

2 須恵器 (図60・61- 33~42、写真11)

竪穴住居跡が分布する丘陵地の平場から斜面上部にかけて、壺・甕等が98点(約2,320g)出土した。第2・6号竪穴住居跡周辺からやや多く出土しているが、土師器以上に、平場一帯に散在するような出土状態である。同一グリッド内での接合以外の接合状態は、L-18・O-20・22グリッド出土資料の接合1例(図60-34)、N-16・R-19グリッド出土資料の接合1例(図61-42)である。

3 製塩土器 (図61- 43~48、写真11)

竪穴住居跡が分布する丘陵地の南側斜面上部から、深鉢等が498点(約4,922g)出土した。平場からは、ほとんど出土していない。

4 縄文・弥生土器 (図61- 49~59、写真11)

丘陵地の平場から斜面上部にかけて、縄文前期後半(図61-49)、中期後半(図61-50)、後・晩期土器(図61-51~56)、弥生中期土器(図61-57~59)等が27点(約184g)出土した。かなり希薄に散在するような出土状態である。同一グリッド内での接合以外の接合状態は、L・M-14グリッド出土資料の接合1例(図61-59)である。

5 土製品 (図62- 60・61、写真11)

竪穴住居跡が分布する丘陵地の南側斜面上部から、羽口・支脚等が19点(約870g)出土した。平場からは、ごく少量出土しただけである。

6 石器 (図62- 62~66、写真11)

丘陵地の平場から、砥石(図62-62・63)が2点、磨製石斧(図62-64)が1点、剥片石器(図62-65・66)が2点出土した。

7 鉄製品・鉄滓 (図62- 67、写真11)

鉄製品は、P-17グリッドから角棒状の製品が1点(図62-67)出土した。鉄製品の一端には、木質部が残っている。鉄滓は、竪穴住居跡が分布する丘陵地の平場から南東斜面上部にかけて、9点(約725g)出土した。

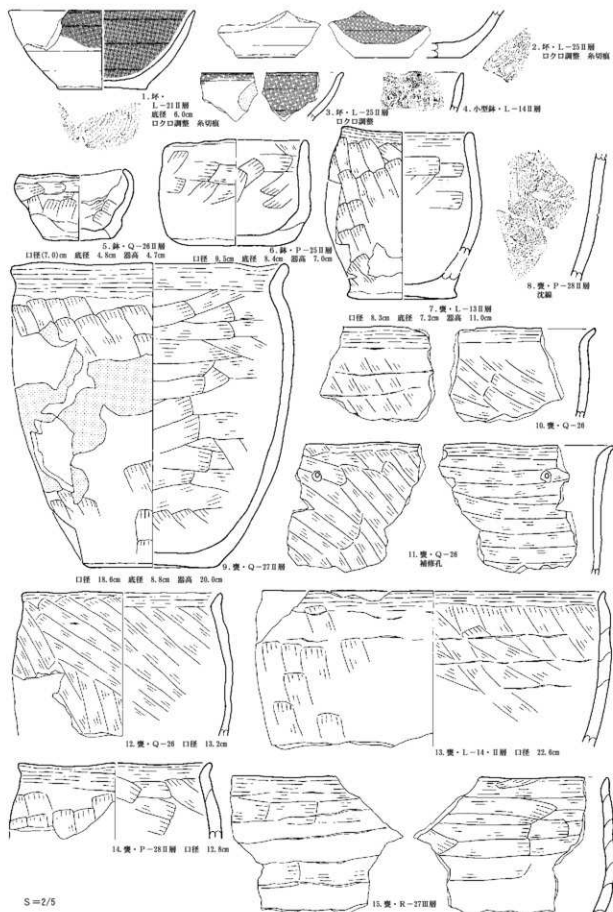


図58 遺構外出土遺物(1)

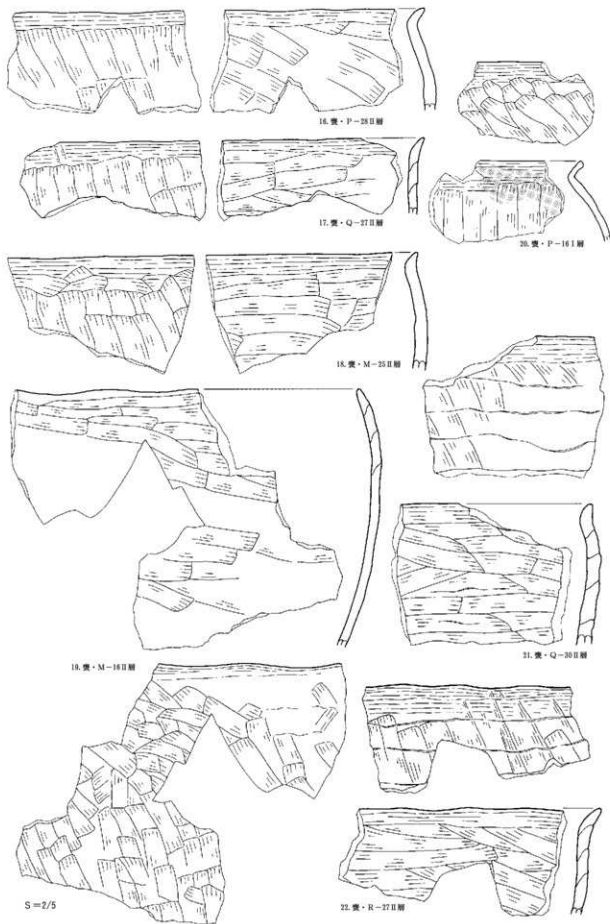


図59 遺構外出土遺物(2)

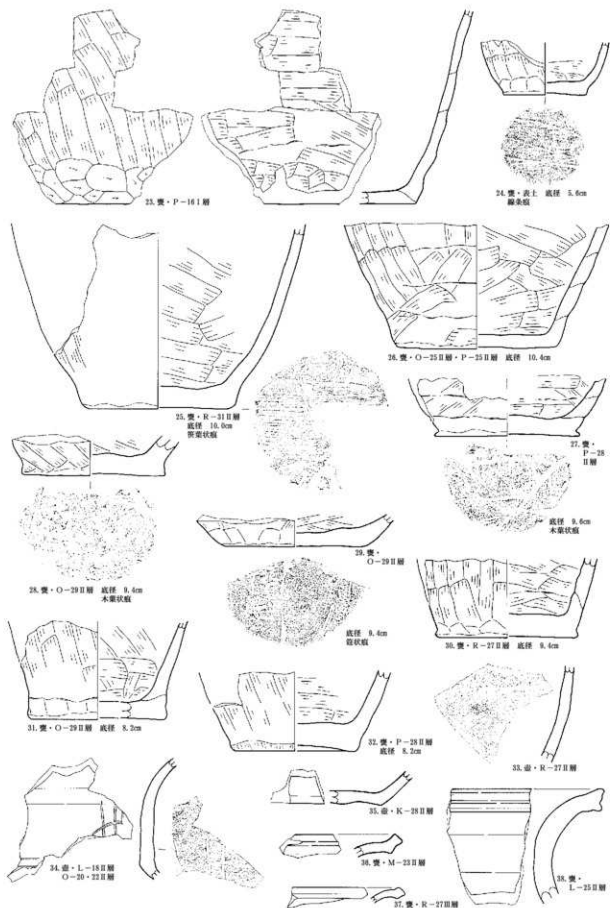


図60 遺構外出土遺物(3)

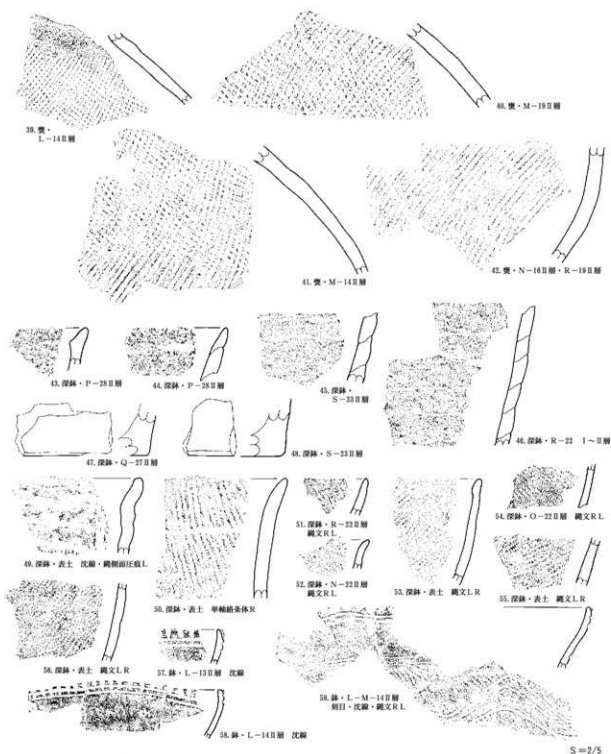


図61 遺構外出土遺物(4)

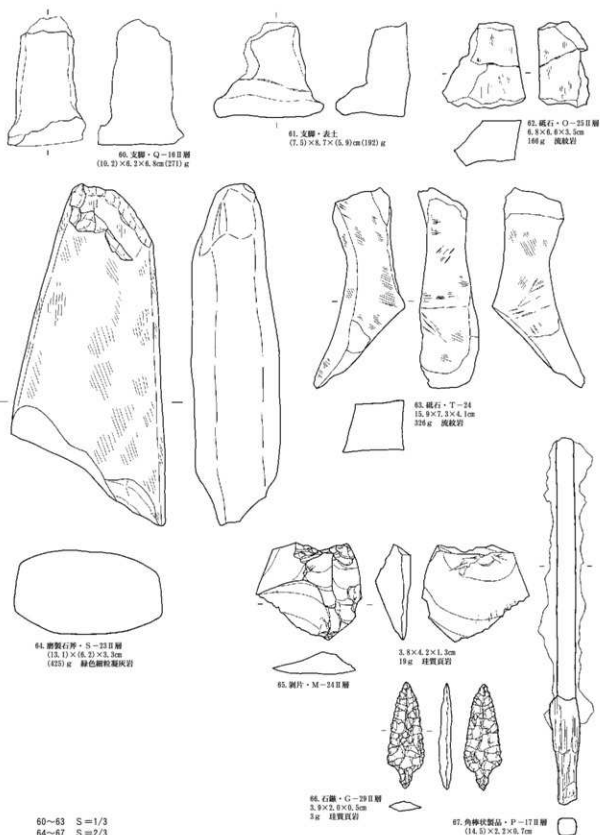


図62 遺構外出土遺物(5)

## 第4章 総括

### 第1節 検出遺構

今回の調査で検出・精査した遺構のうち、縄文時代の溝状土坑1基を除く、竪穴住居跡5軒、竪穴遺構2基、土坑8基、溝跡3条、柱穴状ビット34基、焼土4基は、平安時代の集落を構成するものと考えられる。竪穴住居跡には、一辺が9m前後の比較的大型のものが1軒（第2号竪穴住居跡）、一辺が4～5mの中型のものが2軒（第1・3号竪穴住居跡）、一辺が3m以下の比較的小型のものが2軒（第5・6号竪穴住居跡）ある。大型・中型の竪穴住居跡は埋没途中のもので、第2号竪穴住居跡はかなり大きな凹地、第1・3号竪穴住居跡も少し凹地となっていた。第2号竪穴住居跡はかなり大きな凹地、第1・3号竪穴住居跡も少し凹地となっていた。第2号竪穴住居跡は焼失家屋で、炭化した建築材や木製品等が出土した。遺存した建築材は全体のごく一部であるが、樹種はアスナロが主に利用されていた。また、カマドの前から出土した燃料材には、コナラ節や広葉樹がある（付章第1節参照）。竪穴住居跡のカマドはすべて遺存状態が悪く、煙道部と火床面が確認できるだけで、カマド本体はほとんど残っていない。袖部等の芯材は一部だけ散乱した状態で出土しているため、各竪穴住居跡のカマドは意識的に壊されたものと考えられる。カマドの主軸方向は、第1・2・3・6号竪穴住居跡が概ね南東方向（約N-140-160°-E）、第5号竪穴住居跡だけが概ね南西方向（N-102°-W）となっている。その他、一辺が3.5m前後と2～3mのカマドをもたない竪穴遺構が2基ある。土坑は、竪穴住居跡及び竪穴遺構の内外から多数検出されたが、第1・7号土坑のように深く掘り方のしっかりしたものは少ない。竪穴住居跡内の土坑では、第2号竪穴住居跡の土坑3から、炭化した板材が土坑内に落ち込んだ状態で出土した。この土坑は住居跡の居住区域に作られているので、貯蔵穴に類する土坑に蓋をしていたものとみられる。3条の溝跡は、第1・3・5号竪穴住居跡及び第1号竪穴遺構と、第2・6号竪穴住居跡を区画するように延びており、その幅が狭く浅い掘り方と底面で多数検出された小ビットから、集落の区域を区画する柵列のようなものであったと思われる。柱穴状ビットは、第1号溝跡の周辺からまとまって検出され、2.5m～2.0m前後の間隔で方形に配置されるのみみられる。第1号溝跡と同一及び直交する方向に配列されており、何らかの建物跡と考えられるが、2間程度の間取りとビットの全般に浅い掘り方からみて、比較的簡易な上屋構造のものと思われる。

平安時代の集落は、土師器、須恵器等の出土遺物からみて（第4章第2節参照）、概ね10～11世紀に存続したものとみなされる。集落を構成する遺構の中で10世紀後半の須恵器が出土したのは、第1号竪穴住居跡、第2号竪穴住居跡、第3号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第6号竪穴住居跡、第4号竪穴遺構、第1号土坑、第7号土坑であるが、須恵器の大半は第2号竪穴住居跡から出土しており、第3号竪穴住居跡、第5号竪穴住居跡、第4号竪穴遺構、第1号土坑では3～1点出土しただけである。また、当該時期に降下した白頭山起源の苫小牧火山灰等との関係は、第2号竪穴住居跡が遺構の南西側で苫小牧火山灰及び十和田カルデラ起源の十和田a火山灰の層を切っており、一方、第3号竪穴住居跡内土坑3、第6号竪穴住居跡、第1号竪穴遺構内土坑1、第3号土坑、第8号土坑、第9号土坑、第11号土坑の堆積土中に苫小牧火山灰を少量ないしブロック状に含んでいる。したがって集落は、カマドの主軸方向、須恵器の出土量、苫小牧火山灰との関係等により、第3・5号竪穴住居跡を



主とする10世紀前半以前の遺構と、第2号竪穴住居跡を主とする10世紀後半以降の遺構に分かれるようである。

平安時代の集落が立地している丘陵は、調査対象区域の辺りを東限として、そこから平坦なやせ尾根が概ね西北西の方向に200mほど延び、小沢を隔てて緩い傾斜面が西の方向に延びている。この丘陵を踏査した結果、西北西側のやせ尾根から西側の緩斜面にかけて（調査対象区域外）、計14箇所の竪穴住居跡とみられる凹地を確認した（図63）。このうち3箇所の凹地は、第2号竪穴住居跡クラスの大きな凹地となっている。丘陵の北東側から南側はかなりの急斜面になっているので、集落は大凡この区域に広がっているとみなされる。集落からは、生活用具の主体である土師器、須恵器及び生産用具の製塩土器等の他、少量だが土製品、石器、木製品、鉄製品・鉄滓等が出土しており、また、イネ、アサ、アズキ・ダイズの仲間、ササゲ属等の植物遺体も出土している（付章第2節参照）。向田<sup>57</sup>遺跡は陸奥湾（野辺地湾）岸から1kmほどの開けた丘陵端部に在り、本遺跡で検出した平安時代の集落では、塩、鉄製品等が生産され、農作物、海産物（貝）等が利用されていたようである。

## 第2節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、土器、石器等、縄文時代のごく少量の遺物を除く大半は、平安時代の集落で利用されていたものである。平安時代の集落に伴う遺物としては、土師器、須恵器の他、製塩土器、羽口・支脚等の土製品、礫石器、鉄製品・鉄滓等がある。出土量は、土師器が大半を占め、他は少量ないしごく少量出土しているだけである。土師器は10～11世紀のもので、胎土に粗砂、細礫が目立つ粗雑な作りのものが多い。器種は坏、甕の他、小型もしくはミニチュアの鉢類等がみられ、圧倒的に甕の点数が多くなっている。口縁部片数に基づいた出土量比は、第1号竪穴住居跡（甕70点、鉢類3点）、第2号竪穴住居跡（坏11点、甕169点）、第3号竪穴住居跡（坏1点、甕53点）、第5号竪穴住居跡（甕16点）、第6号竪穴住居跡（甕4点）、第1号竪穴遺構（甕2点）、第4号竪穴遺構（甕16点、鉢類1点）、第1号土坑（甕6点）、第2号土坑（甕7点）、第3号土坑（甕1点）、第7号土坑（甕6点）、第8号土坑（甕2点）、第2号溝跡（甕1点）、遺構外（坏2点、甕465点、鉢類6点）、合計（坏14点、甕818点、鉢類10点）である。坏の出土量が極端に少なく、坏の中には、ロク口を使用していない、粘土帯の接合痕を残したナデ調整・砂底のものが2点（第2号竪穴住居跡出土 図23-36・37）みられる。

須恵器は、すべて五所川原須恵器窯跡前田野目支群の10世紀第3四半期（AD950～975）のものである（注）。器種は壺、甕等がみられ、口縁部片数に基づいた出土量比は、第1号竪穴住居跡（壺1点）、第2号竪穴住居跡（壺5点、甕5点）、第7号土坑（甕1点）、遺構外（壺1点、甕4点）、合計（壺7点、甕10点）である。須恵器の場合、土師器に比べて広範囲に接合する資料が多く、別個の遺構から出土した資料が接合する例もみられる。別遺構出土資料の接合例としては、3軒の竪穴住居跡（第1～3号竪穴住居跡）堆積土及び遺構外各グリッド出土資料の接合例（図13～35）、第2号竪穴住居跡床面及び堆積土各層、ビット4堆積土、第4号竪穴遺構堆積土出土資料の接合例（図26～60）等がある。ただし、最も須恵器が多量に出土し、接合資料も多い第2号竪穴住居跡の接合資料は、同遺構の床面、堆積土各層等から出土した資料の接合例がほとんどである。

製塩土器は、第2号竪穴住居跡及び遺構外からその大半が出土している。遺物の性格上細片が多く、

接合資料は少ない。礫石器は、物自体では縄文時代のもので平安時代のもを判別し難いが、縄文土器の出土量はごく少量であり、遺構内からは全く出土していないので、竪穴住居跡他平安時代の集落を構成すると考えられる遺構から出土したものについては、すべて平安時代のものみなして良いと思われる。

(注) 五所川原市教育委員会生涯学習課 藤原弘明主任のご教示による。

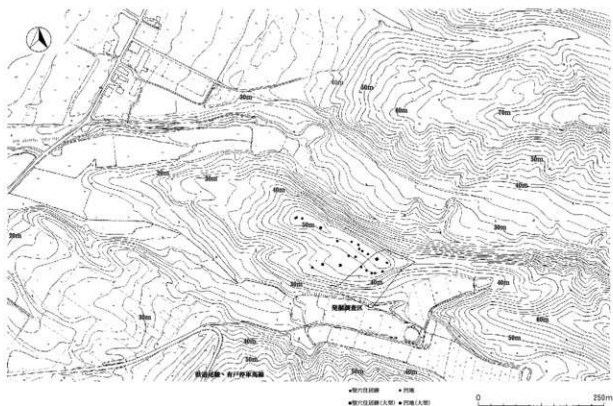


図63 竪穴住居跡と凹地

## 付 章 理化学的分析

### 第 1 節 炭化材の樹種同定

植田弥生 (バレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

ここでは、平安時代の第2号住居跡から出土した炭化材55点と、第5号住居跡の1点、第1号竪穴住居跡の1点、合計57点の樹種同定結果を報告する。

当遺跡は陸奥湾東岸に近い海岸段丘上に形成された平安時代の集落の一部である。第2号竪穴住居跡は大型住居で、この焼失竪穴住居跡内からは多くの炭化材と貯蔵施設や炭化穀類なども確認されている。建築材関連の炭化材のほか、土坑3から出土した炭化材、カマド前から出土した丸木材2点と木製品(容器)1点がある。

下北半島の付け根付近の海岸段丘に立地する平安時代の集落では、建築材にどのような樹種が選択利用されていたのか、また大型住居では特別な樹種選択性が働いていたのかなど、今後の検討課題となる基礎資料としてこの調査は実施された。

#### 2. 試料と方法

各試料の炭化材は、出土した状態の一部分を採取したものではあるが、出土状況の形状をなるべく保つように採取されていた。従って保存のよい試料については、使用されていた材の大きさを知る目安となる、木取りなどの形状や連続して数えられる年輪数を記録した。

樹種同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。針葉樹材は、同定に重要な放射断面を複数作成して観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子株式会社 JSM T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、青森県教育委員会に保管されている。

#### 3. 結果

同定結果の一覧を、表1に示した。

第5号住居跡の土坑3から出土した1点は、アスナロであった。

第1号竪穴遺構の覆土から出土した1点は、樹皮であった。広葉樹樹皮の可能性が高いと思われる(図版3 11a・11b)。

第2号竪穴住居跡の炭化材55点の結果について、次に記す。検出分類群は、針葉樹のアスナロ(32点)、落葉広葉樹のケヤキ(10点)・クリ(6点)・トネリコ属(3点)・コナラ節(2点)・カツラ(1点)、広葉樹(1点)であった。

55点中の32点がアスナロで、最も多く利用されていた。アスナロの炭化材は、木取りは柁目が多い。

その取り上げられた破片の横断面から数えた年輪数は、最も少ない破片で8年輪(N<sub>52</sub>)、最も多い破片では73年輪(N<sub>43</sub>)あり、30年輪以上を越えるものが半数以上である。アスナロの炭化材には、加工痕や加工の形状が残るものも(N<sub>35</sub>・41)あった。

アスナロに次いで多く検出されたのは、ケヤキである。ケヤキの破片から数えた年輪数は、最も少ない破片で25年輪(N<sub>51</sub>)、最も多い破片では56年輪(N<sub>46</sub>)あり、30年輪以上を越える破片がほとんどであった。

土坑3からもアスナロ9点とケヤキ7点そしてクリ1点が検出されているが、4層・2層・床面から出土した同一分類群の炭化材と、形状や大きさに目立った差異は認められなかった。

トネリコ属2点(N<sub>19</sub>・28)は分割材と見られ、27年輪と36年輪が数えられた。

カツラ1点(N<sub>31</sub>)は、推定直径約4cmの芯持ち丸木材と推測される形状であった。

クリ6点のうち1点は木製品(N<sub>39</sub>)で、5区出土のNo2・33・34は、樹芯部が含まれていないが、年輪線のカーブの度合いから、樹芯部に近い部位の材が直径5～10cm程度の幹・枝材と推測されるものであった。

コナラ節のNo4は、角状の分割材のようであった。

木製品1点と丸木材2点からアスナロは検出されていない。No37丸木材①は保存が悪く広葉樹材であることしか同定出来なかったが、No38丸木材②はコナラ節、No39木製品(容器)はクリであった。

住居内の出土地区・層ごとに検出樹種を比較すると(表2)、W区4層と木製品・丸木材以外は一樣にアスナロが多く検出されており、特に地区や層において検出樹種の偏りは認められなかった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の材組織写真を提示した。

- (1)アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版1 1a-1c(N<sub>8</sub>) 図版3 7a-7c(N<sub>35</sub>) 8a・8c(N<sub>53</sub>) 9c(N<sub>43</sub>)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、晩材部仮道管壁の肥厚は少ない。分野壁孔は小型。輪郭および孔口は円形から楕円形、1分野に2～5個、稀に6個あり、壁孔はやや雑然と配置している。

アスナロは日本特産で1属1種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用である。

- (2)コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 2a-2c(N<sub>4</sub>)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部では薄壁で角形の非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列のものと細胞幅が非常に広い放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は硬く丈夫である。

- (3)クリ *Gastanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c(N<sub>2</sub>)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔で晩材部では階段穿孔もある。放射組織は単列同性で

ある。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野で普通にみられる落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(4)ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Maki no ニレ科 図版2 4 a-4 c (№20)

年輪の始めに大型の管孔が1~2層配列し、その後は非常に小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は半穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~8細胞幅、上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

(5)カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版2 5 a-5 c (№31)

小型で多角形の管孔が年輪内に密に年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状や階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1~2細胞幅、多列部の上下端に方形細胞と直立細胞が単列で1~3細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

(6)トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版2 5 a-5 c (№28)

大型の管孔が2~3層配列し、晩材部は単独または2~3個が放射状に複合した小型で厚壁の管孔が分布する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は半穿孔である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種があるが、材組織から種類は特定できない。材は重硬で弾力性があり折れ難い。

#### 4. 考察

大型住居である第2号竪穴住居跡の主要建築材は、針葉樹のアスナロであった事が判った。このほかに、ケヤキ・クリ・トネリコ属などの落葉広葉樹も利用されていた。炭化材の横断面の観察からは、アスナロの材の木取りは柁目が多く、採取された破片の横断面から数えた年輪数は最も多い破片で73年輪があり、30年輪以上を越えるものが半数以上あった。またアスナロについて出土数が多いケヤキの年輪数も30年輪以上がほとんどであった。これらは樹芯部を含まない破片であることから、アスナロとケヤキは太く樹齢の多い幹材・枝材を加工して建築材として利用していたと推測された。アスナロの炭化材からは、加工痕や加工の形状が残るものも(№35・41)あった。土坑3からもアスナロ9点とケヤキ7点そしてクリ1点が検出され、4層・2層・床面から出土した樹種と目立った差異は認められなかった。土坑に関して、住居建築材と同様な樹種選択がなされていたようである。カマド前床面からは、アスナロ2点とクリ2点が検出されているが、クリの炭化材は芯持ち丸木の形状に近いことから、燃料材の可能性も考えられる。

普通サイズの第5号竪穴住居跡の建築材は1点であるが、これもアスナロであった。この集落跡では、住居跡の大きさに関らず、アスナロが多用されていた可能性も考えられる。

山田(1993)によると、青森県内では平安時代の住居跡出土炭化材は、青森市や南津軽郡ではクリやスギが多く、八戸市や三沢市そして上北郡ではコナラ節が多い傾向が見られる。青森市に所在する平

安時代(9世紀後半～10世紀前半)の近野遺跡の住居跡炭化材もクリが圧倒的に多く、アスナロも検出されているが僅かである(青森県教育委員会、2005)。下北半島の付け根付近に位置する上北郡野辺地町の当遺跡では、クリとコナラ節は少なく、アスナロが最も多く、次にケヤキが多いことが判った。当遺跡が所在する下北半島には針葉樹の有用建築材として知られるヒノキ科のヒノキ・サウラ・ネズコ、スギ科スギ、マツ科モミ属は分布していないが、ヒノキ科アスナロやマツ科マツ属は分布している。下北半島にはヒバ(アスナロとその北方型変種ヒノキアスナロの一括総称)の埋没林が分布していることから(青森県教育委員会 2001)、森林面積や材蓄積量は多く豊富であったことが想像される。従って当地域の最も有用な建築材として、生育分布しているアスナロが選択的に利用されたと考えられる。

#### 引用文献

- 山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成- 用材から見た人間・植物関係史、54-57 植生史研究 特別第1号。
- 青森県教育委員会(2001) 生態系のタイムカプセル- 青森県埋没林調査報告書 - 。
- 青森県教育委員会(2005) 近野遺跡 VIII 。

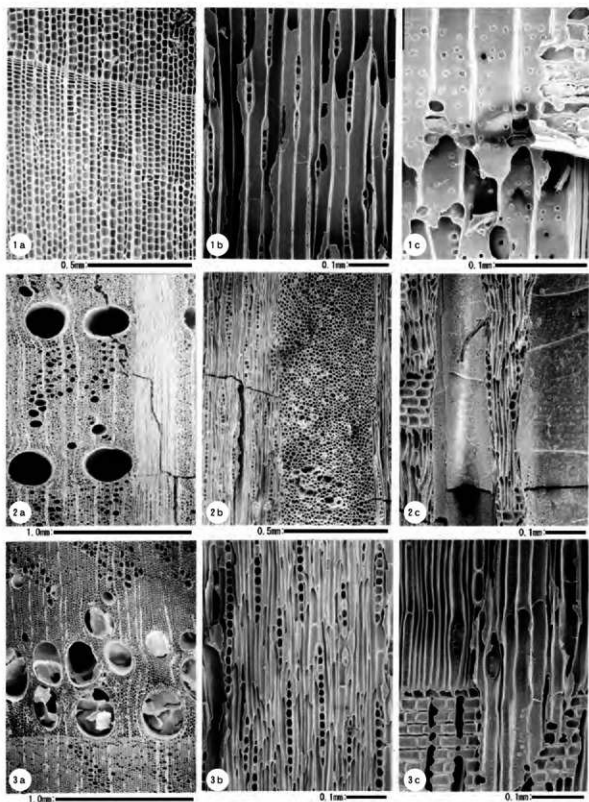
表1 向田<sup>37</sup>遺跡竪穴住居跡(平安時代)出土炭化材樹種同定結果一覧

試料No	サンプルNo・注記	地区・層位	樹種	取上げ時点での木取り	放射方向の径とおよびその年輪数	備考
1	第2号竪穴住居跡 C-1	S区4層	アスナロ			
2	第2号竪穴住居跡 C-2	S区4層	クリ	芯走り、分割?		
3	第2号竪穴住居跡 C-3	W区4層	トネリコ属	芯走り、分割?		
4	第2号竪穴住居跡 C-4	W区4層	コナラ部	芯走り、分割?、角状	18mm 22年輪	
5	第2号竪穴住居跡 C-5	N区4層	アスナロ	板目板状	85mm 60年輪	一部生焼け
6	第2号竪穴住居跡 C-6	E区4層	アスナロ			
7	第2号竪穴住居跡 C-7	E区4層	アスナロ			
8	第2号竪穴住居跡 C-8-1	N区4層	アスナロ	板目板状	55mm 40年輪	
9	第2号竪穴住居跡 C-8-2	N区4層	アスナロ			
10	第2号竪穴住居跡 C-8-3	N区4層	クリ	斜め板目?		小破片
11	第2号竪穴住居跡 C-8-4	N区床面	アスナロ	板目板状	25mm 47年輪	
12	第2号竪穴住居跡 C-8-5	N区床面	アスナロ	分割	40mm 36年輪	一部生焼け
13	第2号竪穴住居跡 C-8-6	N区床面	アスナロ	板目板状	35mm 30年輪	
14	第2号竪穴住居跡 C-8-7	N区4層	アスナロ	板目板状	12mm 12年輪	
15	第2号竪穴住居跡 C-8-8	N区4層	アスナロ	分割	25mm 22年輪	
16	第2号竪穴住居跡 C-8-9	N区4層	アスナロ	分枝部分		樹芯部を含む
17	第2号竪穴住居跡 C-8-10	N区4層	アスナロ	板目板状	49mm 48年輪	
18	第2号竪穴住居跡 C-8-11	N区4層	ケヤキ	斜め板目板材		
19	第2号竪穴住居跡 C-8-12-a	N区4層	トネリコ属	分割	52mm 36年輪	
20	第2号竪穴住居跡 C-8-12-b	N区4層	ケヤキ	分割	33mm 28年輪	
21	第2号竪穴住居跡 C-8-13	N区4層	アスナロ	分割?		一部生焼け
22	第2号竪穴住居跡 C-8-14	N区4層	アスナロ	板目板状	25mm 21年輪	
23	第2号竪穴住居跡 C-8-15	N区4層	アスナロ	板目板状	58mm 46年輪	
24	第2号竪穴住居跡 C-8-16	N区4層	アスナロ	板目板状	60mm 65年輪	
25	第2号竪穴住居跡 C-8-17	N区床面	アスナロ	板目板状	65mm 49年輪	
26	第2号竪穴住居跡 C-8-18	N区床面	アスナロ	板目板状	50mm 36年輪	
27	第2号竪穴住居跡 C-8-19	N区床面	アスナロ	板目板状	27mm 33年輪	
28	第2号竪穴住居跡 C-8-20	N区床面	トネリコ属	分割	37mm 27年輪	
29	第2号竪穴住居跡 C-8-21	N区床面	アスナロ	板目板状	48mm 52年輪	
30	第2号竪穴住居跡 C-8-22	N区床面	ケヤキ	斜め板目板材	60mm 46年輪	
31	第2号竪穴住居跡 C-8-23	N区床面	カツラ	推定直径4.0mm 芯持ち丸木?		
32	第2号竪穴住居跡 C.サンプル	土坑3 1層	アスナロ	板目	25mm 18年輪	
33	第2号竪穴住居跡 C-9-1	S区カマド前 床面	クリ	芯持ち丸木 または丸木分割材	35mm 20年輪	
34	第2号竪穴住居跡 C-9-2	S区カマド前 床面	クリ	分枝部を含む破片	22mm 11年輪	
35	第2号竪穴住居跡 C-9-3	S区カマド前 床面	アスナロ	芯走り構円形	50mm 48年輪	加工痕か?
36	第2号竪穴住居跡 C-9-4	S区カマド前 床面	アスナロ	板目板状破片	35mm 57年輪	
37	第2号竪穴住居跡 C-9-①	床面	広葉樹			
38	第2号竪穴住居跡 C-9-②	床面	コナラ部	板目状破片	10mm 7年輪	管轄破片
39	第2号竪穴住居跡 C-9.木製品	床面	クリ			
40	第2号竪穴住居跡 C-10-1	土坑3 2層	クリ	破片		
41	第2号竪穴住居跡 C-10-2	土坑3 2層	アスナロ	板目板状破片	20mm 27年輪	平滑加工面? 一部生焼け
42	第2号竪穴住居跡 C-10-3	土坑3 2層	アスナロ	板目板状破片	50mm 63年輪	
43	第2号竪穴住居跡 C-10-4	土坑3 2層	アスナロ	板目板状破片	78mm 73年輪	
44	第2号竪穴住居跡 C-10-5	土坑3 2層	アスナロ	板目板状破片	50mm 52年輪	
45	第2号竪穴住居跡 C-10-11	土坑3 4層	ケヤキ	角状破片	63mm 45年輪	
46	第2号竪穴住居跡 C-10-12	土坑3 4層	ケヤキ	角状破片	77mm 56年輪	
47	第2号竪穴住居跡 C-10-13	土坑3 4層	アスナロ	破片	9mm 9年輪	
48	第2号竪穴住居跡 C-10-14	土坑3 4層	アスナロ	板目板状破片	53mm 38年輪	
49	第2号竪穴住居跡 C-10-15	土坑3 4層	ケヤキ	板目板状破片	55mm 39年輪	
50	第2号竪穴住居跡 C-10-16	土坑3 4層	ケヤキ	角状破片	55mm 40年輪	
51	第2号竪穴住居跡 C-10-17	土坑3 4層	ケヤキ	角状破片	46mm 25年輪	
52	第2号竪穴住居跡 C-10-18	土坑3 4層	アスナロ	破片	5mm 8年輪	
53	第2号竪穴住居跡 C-10-19	土坑3 4層	アスナロ	破片	10mm 13年輪	
54	第2号竪穴住居跡 C-10-20	土坑3 4層	アスナロ	板目状の薄丸破片	38mm 46年輪	
55	第2号竪穴住居跡 C-10-21	土坑3 4層	ケヤキ	板目板状破片	70mm 38年輪	
56	第2号竪穴住居跡 C-10-22	土坑3 4層	ケヤキ	板目板状破片	50mm 34年輪	
57	第1号竪穴遺構 C.サンプルQ-22	堆積土	樹皮	厚み2mm前後		

表2 向田<sup>37</sup>遺跡竪穴住居跡の検出樹種集計

樹種	住居跡										合計
	W区		E区		S区		N区		土坑3		
	4層	4層	4層	カマド前床面	4層	床面	2層	4層	1層	堆積土	
アスナロ		2	1	2	11	7	4	5	1		33
クリ				1	3	1		1			6
コナラ部	1			1							2
ケヤキ					2	1		7			10
トネリコ属	1				1	1					3
カツラ						1					1
広葉樹				1							1
樹皮										1	1
合計	2	2	2	7	15	10	5	12	1	1	57

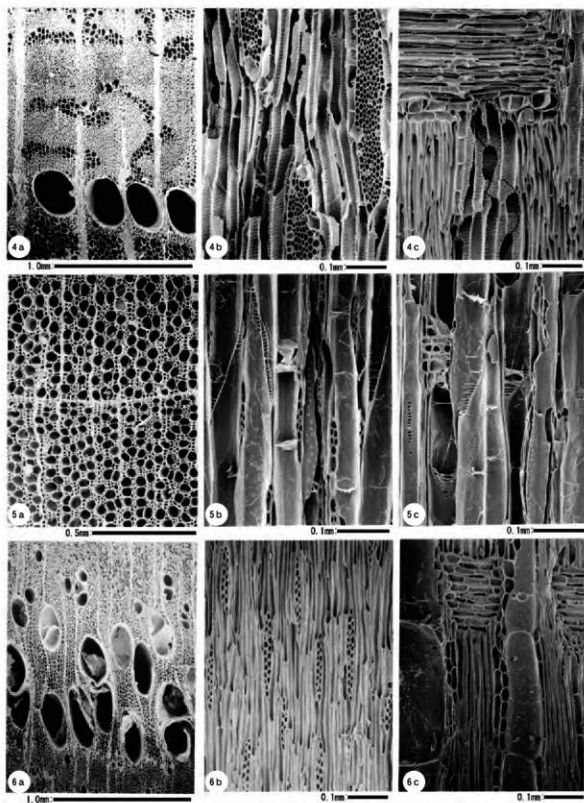
\* 第2号竪穴住居跡では、セクションベルトを横として、遺構内をN区(北側)、S区(南側)、E区(東側)、W区(西側)に分けて、出土遺物を取り上げた。



図版 1 向田の遺跡竈穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

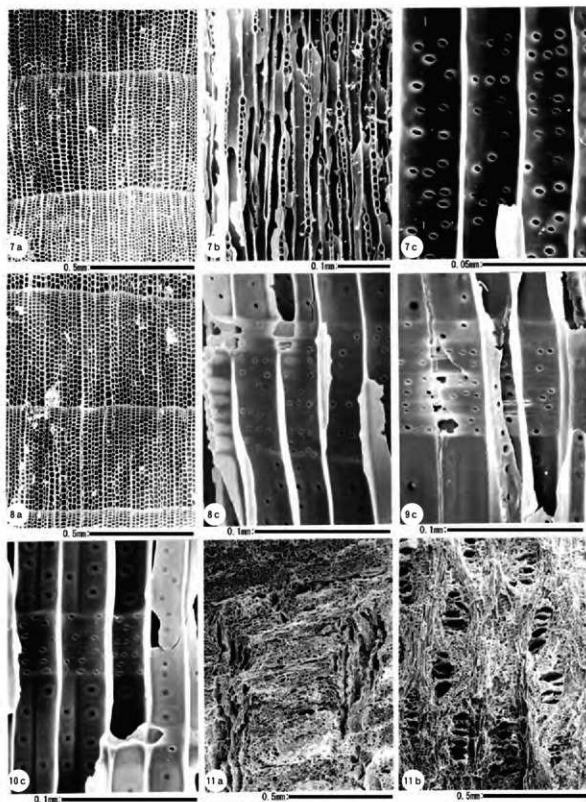
1 a - 1 c : アスナロ(№8) 2 a - 2 c : コナラ節(№4) 3 a - 3 c : クリ(№2)  
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面





図版 2 向田<sup>37</sup>遺跡竈穴住居跡出土炭化木材組織の走査電子顕微鏡写真

4 a - 4 c : ケヤキ (No.20)    5 a - 5 c : カツラ (No.31)    6 a - 6 c : トネリコ属 (No.28)  
 a : 横断面    b : 接線断面    c : 放射断面



図版3 向田の遺跡竪穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

7a - 7c : アスナロ(№35) 8a - 8c : アスナロ(№53) 9c : アスナロ(№43)  
 10c : アスナロ(№48) 11a・11b : 樹皮(№57) a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

## 第2節 炭化種実の同定

新山雅広 (バレオ・ラボ)

## 1. はじめに

向田<sup>37)</sup>遺跡の第2号竪穴住居跡(床面)から出土した炭化種実を検討し、利用植物の推定を試みた。

## 2. 試料と方法

炭化種実の検討は、抽出済みでタッパーに乾燥保存された1試料について行った。同定・計数は、実体顕微鏡下で行った。

## 3. 出土した炭化種実

同定されたのは、草本のみでイネ炭化胚乳、アサ炭化種子、アズキの仲間炭化種子、ササゲ属炭化種子、ダイズの仲間炭化種子の5分類群であった。出土種実は、完形以外にも半分ないし破片を含んでおり、半分(1/2片)程度を2点で完形1個分として換算し(ダイズの仲間の完形・破片も2点で完形1個分とした)。詳細は形態記載を参照)、各分類群のおよその完形数を算出した。その結果、全体では500個近くの種実が含まれており、そのうち過半数の270個程度がササゲ属であった。また、アサ、ダイズの仲間も比較的多く、各20%(100個)程度を占めていた。残りは、アズキの仲間(約9個、2%弱)とイネ(1個)であった。

## 4. 形態記載

(1)イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。出土したものは、やや不明瞭であるが、両面の表面には縦方向の2本の筋が入り、3等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。胚は残存している。

(2)アサ *Cannabis sativa* Linn. 炭化種子

楕円状レンズ形で下端には楕円形の臍がある。

(3)アズキの仲間 *Vigna angularis* var. *angularis* type 炭化種子

マメ類の分類は、吉崎(1992)により、半割状態で観察できる初生葉と幼根の形態や立ち上がりの角度から、アズキの仲間(アズキ)、リョクトウの仲間(ヤブツルアズキ、クロアズキ、ケツルアズキ)、ダイズの仲間(ツルマメ、ヤブマメ、ダイズ)の3つにグルーピングされている。本遺跡の出土種子には、初生葉と幼根を確認できるものが18点あり、いずれも幼根が緩やかに斜めに立ち上がり、初生葉は小さく垂れ下がるので、アズキの仲間と同定された。

(5)ササゲ属 *Vigna* 炭化種子

完形181個のうち、11個に臍ないし臍の一部が残存していた。ササゲ属の臍は、長さ2.0~3.0mm前後の長楕円形であり、一方にやや片寄って位置する。臍の周囲は隆起してざらつく。種子のおよその大きさは、長さ4.3~6.8(平均5.3)mm、幅2.9~4.5(平均3.6)mm、厚さ2.9~4.7(平均3.6)mmであり、幅、厚さに比べて長さにややばらつきがある。幅/厚さの比は、約0.9~1.2(平均1.0)であり、かなりまとまりがある。幅と厚さがほぼ同等なため、断面は丸みを帯びる。

(5)ダイズの仲間 *Glycine max* type 炭化種子

完形15個は、不明瞭ながらも臍や臍の痕跡を残していた。長さ2.0mm前後の扁平な楕円形でほぼ中央に位置する。臍の横には幼根部の膨らみが顕著なものが見られる。半分に割れた1/2片は、ササゲ属と異なり、非常に少なく、1点のみであった。ダイズの仲間の幼根と胚軸は、狭長で種皮に沿って曲がり、初生葉は小さく、子葉内面に大きく垂れ下がる。そのため、子葉内面には、ササゲ属の

ような広い窪みは見られず平滑である。種子のおよその大きさは、長さ6.2~9.3(平均7.6)mm、幅4.7~7.0(平均5.9)mm、厚さ4.0~6.8(平均4.9)mmであり、ササゲ属よりも大きい傾向がある。また、長さ・幅・厚さ共に、ササゲ属に比べてばらつきが大きい、特に長さにはばらつきがある。幅/厚さの比は、約1.0~1.5(平均1.2)であり、ササゲ属に比べて扁平である。なお、ダイズの仲間は、ササゲ属に比べて、状態(発泡・欠損・焼け膨れ・変形)が非常に悪いものが目立つ。そのため、完形か破片かの識別が困難なものも多く、一覧表ではそれらを完形-破片とした。経路上、ダイズの仲間の状態が悪いものは、これまでも目にしてきたことがある。火を受けた時に、このような違いが生じるのは、ダイズの仲間とササゲ属との間に形態的以外の何らかの差異があることを示唆しているのかもしれない。

## 5. 考察

第2号竪穴住居跡の床面から出土した炭化種実を検討した結果、イネ、アサ、アズキの仲間を含むササゲ属、ダイズの仲間が同定された。マメ類が全体の8割近くを占め、圧倒的に多かったが、中でもササゲ属が全体の過半数であった。ササゲ属は、アズキの仲間やリュクトウの仲間を含む分類群であるが、同定されたのはアズキの仲間のみであり、ササゲ属の大半もしくは全てがアズキの仲間である可能性が考えられる。ダイズの仲間は、完形か破片かの識別が困難なほど状態が悪いものが目立ち、全体に占める比率に幾分の誤差があるかもしれないが、2割前後を占めると推定される。なお、マメ類は、大まかなグルーピングはできても、現段階では栽培種と野生種とに識別することはできない(吉崎・楢坂, 2001)。従って、本遺跡出土のマメ類が栽培種か野生種なのかといった実体は不明であるが、いずれにしても住居跡からまとまって出土したことから、利用されていたことは明らかであろう。また、極めて稀少ではあったが、栽培植物のイネや全体の2割近くを占めていたアサモ油・繊維・葉用など、何らかの形で利用されていたと考えられる。

## 6. おわりに

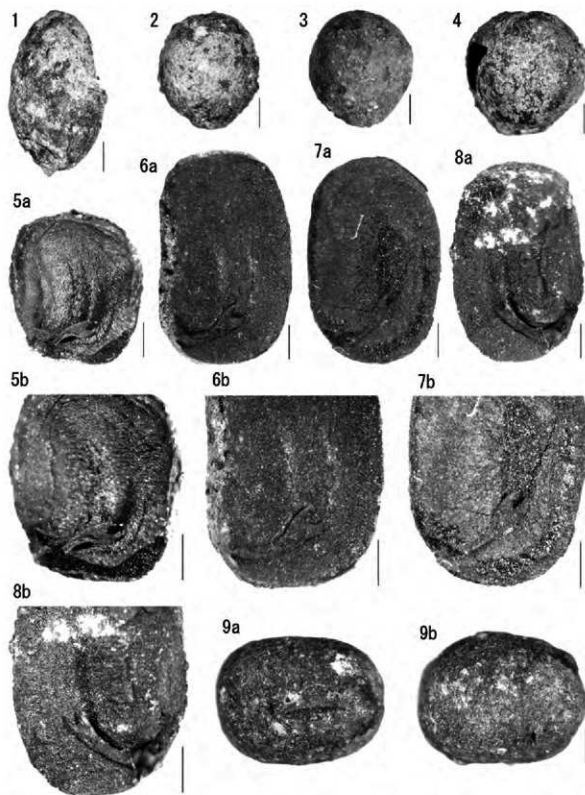
第2号竪穴住居跡の床面から出土した炭化種実を検討した結果、イネ、アサ、アズキの仲間、ササゲ属、ダイズの仲間が利用されていたと考えられた。出土個数としては、マメ類が圧倒的に多く、中でもササゲ属が全体の過半数であった。このササゲ属は、大半もしくは全てがアズキの仲間である可能性が考えられた。

## 引用文献

- 吉崎昌一(1992) 古代雑穀の検出, 考古学ジャーナルNo. 355: 2-14, ニュー・サイエンス社。  
 吉崎昌一・楢坂恭代(2001) 先史時代の豆類について—考古植物学の立場から, 豆類時報No. 24: 1-9.

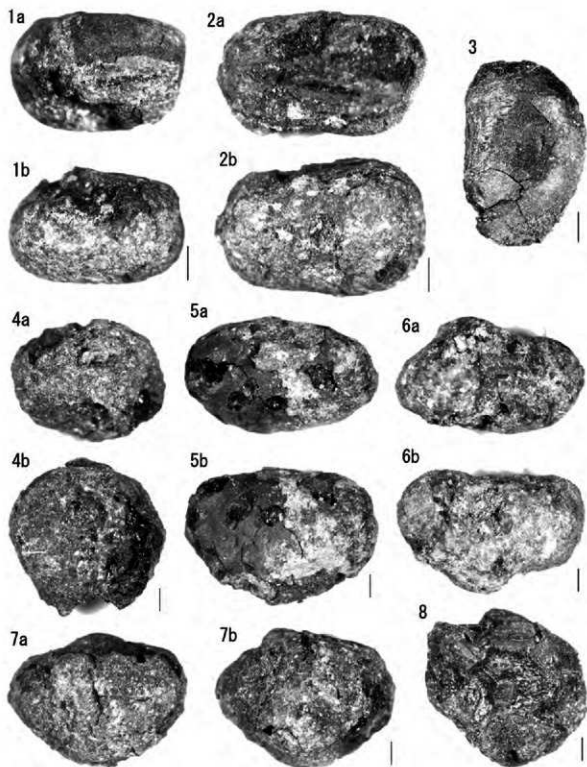
表1 炭化種実出土一覧表

分類群	部位	状態	個数	完形換算	比率(%)
イネ	炭化胚乳	完形	1	1	0.2
		完形	102	114	23.1
アサ	炭化種子	1/2片	24		
		1/2片	16	約9	1.8
アズキの仲間	炭化種子	1/4片	2		
		完形	181		
		1/2片	155	約270	54.7
		1/4片	31		
		1/4未満	17		
ササゲ属	炭化種子	完形	15		
		完形-破片	161	約100	20.2
		1/2片	1		
		1/2片	1		
ダイズの仲間	炭化種子	完形	15		
		完形-破片	161	約100	20.2
		1/2片	1		



図版1 出土した炭化種実 (スケールは1mm)

1. イネ、炭化胚乳 2-4. アサ、炭化種子 5-8. アズキの仲間、炭化種子  
9. ササゲ属、炭化種子



図版2 出土した炭化種実 (スケールは1mm)

1, 2. ササゲ属、炭化種子 3. ダイズの仲間、炭化種子(半割、子葉内面)  
4 - 8. ダイズの仲間、炭化種子



東から撮影



南から撮影  
遺跡全景



炭化材出土状態



炭化材出土状態

第2号竖穴住居跡 土坑3





調査区近景 (S→)



L-24グリッド基本土層 (W→)



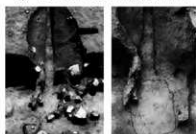
Q-27グリッド遺物出土状態 (W→)



第1号竪穴住居跡完掘 (N→)



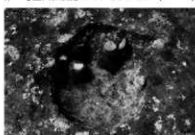
第1号竪穴住居跡カマドセクション (A-B)



カマド遺物出土状態 カマド完掘



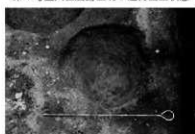
第1号竪穴住居跡土坑3 遺物出土状態



第1号竪穴住居跡土坑2 遺物出土状態



第1号竪穴住居跡土坑5 遺物出土状態



第1号竪穴住居跡土坑6 完掘



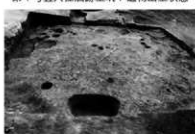
第1号竪穴住居跡土坑7 遺物出土状態



第1号竪穴住居跡土坑8 遺物出土状態



第1号竪穴住居跡土坑12セクション (A-C)



第2号竪穴住居跡完掘 (NW→)



第2号竪穴住居跡完掘 (SW→)



第2号竪穴住居跡表土掘削作業



第2号竪穴住居跡表土掘削後 (NE→)



第2号竪穴住居跡1層掘削後 (NE→)

写真1 竪穴住居跡(1)



第2号竪穴住居跡2 層掘削後 (NE →)



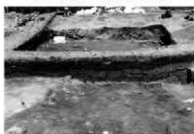
第2号竪穴住居跡セクション



第2号竪穴住居跡セクション



第2号竪穴住居跡セクション



第2号竪穴住居跡セクション



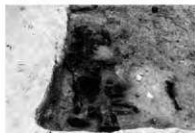
第2号竪穴住居跡4 層遺物出土状態



第2号竪穴住居跡4 層遺物出土状態



第2号竪穴住居跡床面炭化材出土状態 (北隅)



第2号竪穴住居跡床面炭化材出土状態 (北隅)



第2号竪穴住居跡カマド前炭化材出土状態



第2号竪穴住居跡炭化製品出土状態



第2号竪穴住居跡腰板出土状態 (東隅)



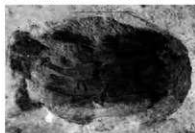
第2号竪穴住居跡カマドセクション (A-B)



第2号竪穴住居跡出入口 (NW →)



第2号竪穴住居跡土坑3 炭化材出土状態 (上位)



第2号竪穴住居跡土坑3 炭化材出土状態 (下位)



第2号竪穴住居跡土坑3 炭化材出土状態 (下位)

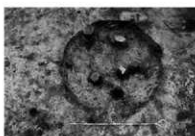


第2号竪穴住居跡土坑3 炭化材出土状態 (下位)

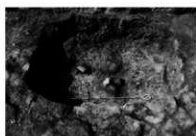
写真2 竪穴住居跡(2)



第2号竪穴住居跡土坑3完掘



第2号竪穴住居跡土坑1遺物出土状態



第2号竪穴住居跡土坑5遺物出土状態



第2号竪穴住居跡土坑5完掘



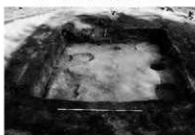
第2号竪穴住居跡東隅土坑



第3号竪穴住居跡セクション(C-D)



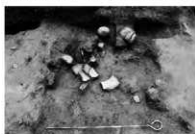
第3号竪穴住居跡セクション(A-B)



第3号竪穴住居跡完掘(NW→)



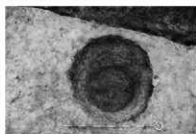
第3号竪穴住居跡カマドセクション(A-B)



第3号竪穴住居跡カマド遺物出土状態



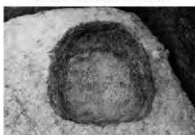
第3号竪穴住居跡カマド完掘



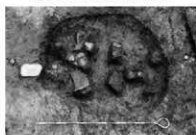
第3号竪穴住居跡土坑1完掘



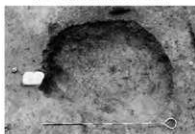
第3号竪穴住居跡土坑2完掘



第3号竪穴住居跡土坑3完掘



第3号竪穴住居跡土坑4遺物出土状態



第3号竪穴住居跡土坑4完掘



第3号竪穴住居跡土坑6完掘



第5号竪穴住居跡セクション(A-B)

写真3 竪穴住居跡(3)



第5号竪穴住居跡セクション (C-D)



第5号竪穴住居跡完観 (E→)



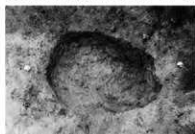
第5号竪穴住居跡カマドセクション (A-B)



第5号竪穴住居跡カマド遺物出土状態



第5号竪穴住居跡土坑2完観



第5号竪穴住居跡土坑5完観



第6号竪穴住居跡セクション (A-B)



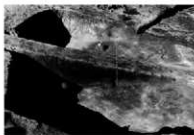
第6号竪穴住居跡完観 (SE→)



第6号竪穴住居跡カマド



第1号竪穴遺構完観 (NW→)



第4号竪穴遺構セクション (A-B)



第4号竪穴遺構遺物出土状態



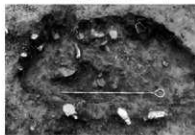
第4号竪穴遺構完観 (SE→)



第1号土坑セクション (A-B)



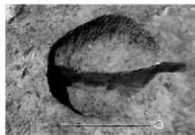
第1号土坑完観 (SE→)



第2号土坑遺物出土状態



第2号土坑完観 (NW→)



第3号土坑完観 (SW→)

写真4 竪穴住居跡(4)・竪穴遺構・土坑(1)



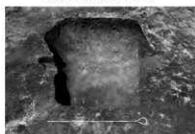
第6号土坑完掘 (N→)



第7号土坑完掘 (SE→)



第8号土坑セクション (A-B)



第8号土坑完掘 (SW→)



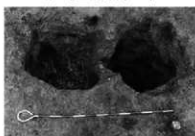
第9号土坑完掘 (N→)



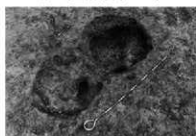
第11号土坑完掘 (SW→)



第1号溝状土坑完掘 (W→)



柱穴状ビット群 ビット1・2完掘 (S→)



柱穴状ビット群 ビット6・7完掘 (S→)



柱穴状ビット群 ビット17完掘 (S→)



南側沢地の調査状況



第2号竪穴居跡掘削前の測量



丘陵上部の調査状況



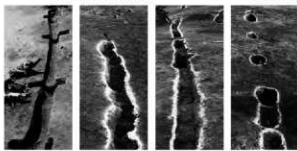
竪穴住居跡の調査状況



竪穴住居跡の調査状況



竪穴住居跡の調査状況



第2号溝跡完掘

写真5 土坑②・柱穴状ビット群・溝跡・調査状況

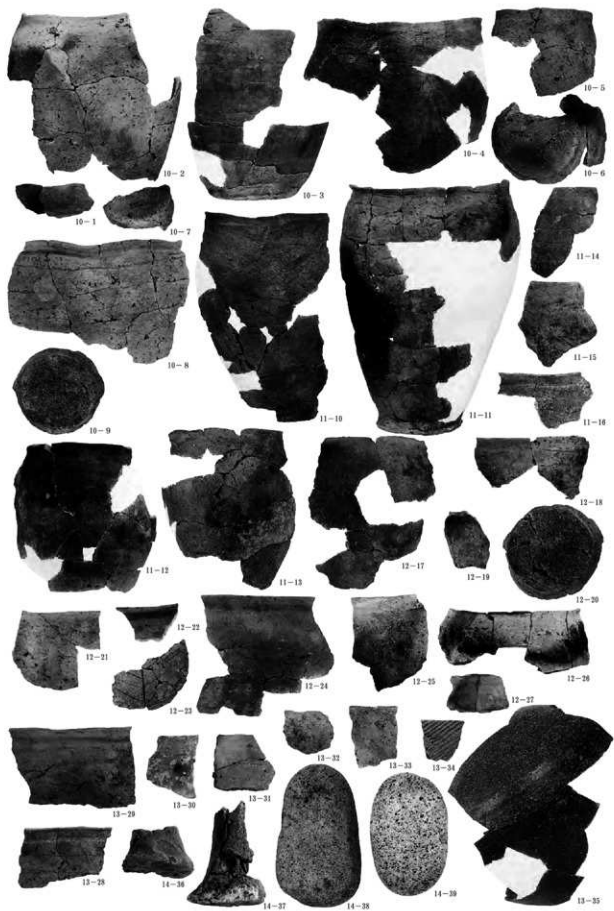


写真6 竪穴住居跡出土遺物(1)

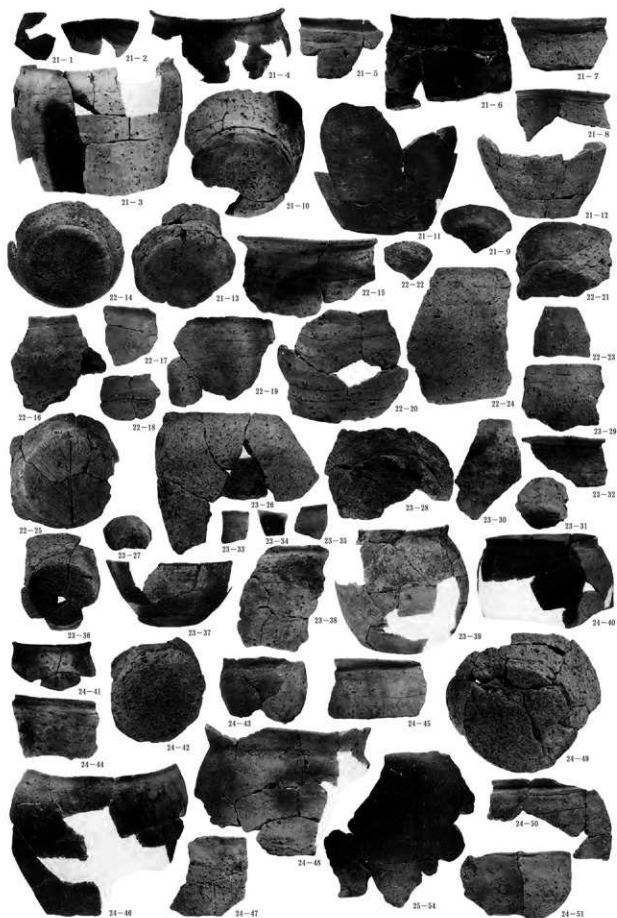


写真7 竖穴住居跡出土遺物(2)



写真 8 竪穴住居跡出土遺物③





写真 9 竖穴住居跡出土遺物(4)

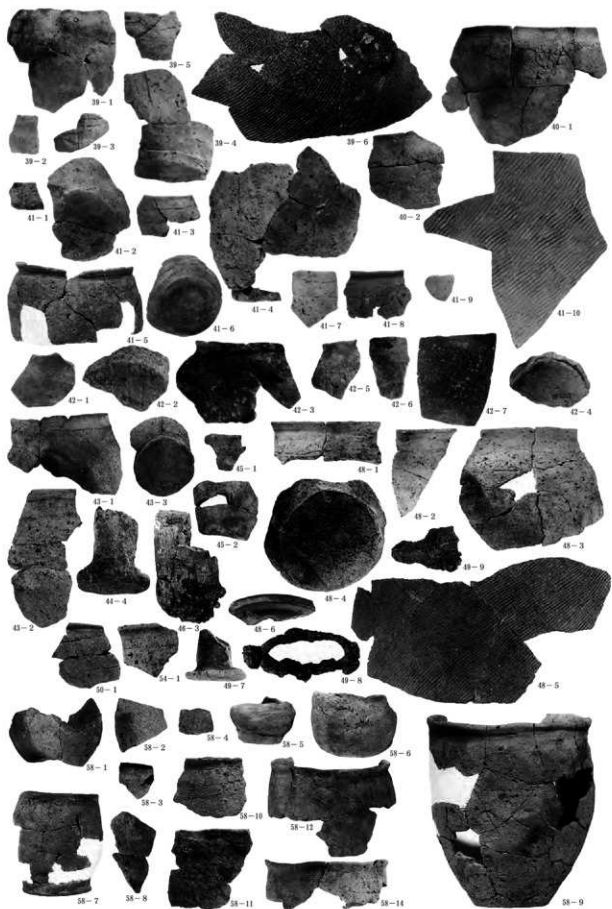


写真10 竪穴住居跡(5)・竪穴遺構・土坑・溝跡・遺構外出土遺物(1)

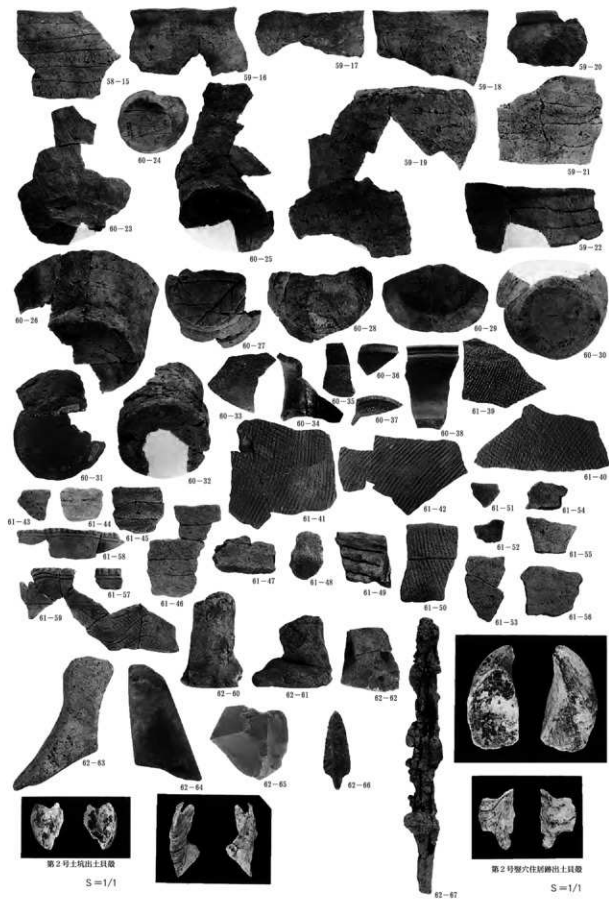


写真11 遺構外出土遺物(2)・貝殼

## 報告書抄録

ふりがな	むかいだ いせき						
書名	向田遺跡						
副書名	一般国道279号道路改築事業(有戸北バイパス)に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第408集						
編著者名	工藤 大						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森市新城市天田内152-15 T E L 017-788-5701						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦2006年 3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		旧日本測地系 (Tokyo Datum)	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
むかいだ 向田遺跡	あおもりけん 青森県 かほろまへ 上北郡 のほりまき町 野辺地町字 むかいだ 向田379外	02401	40139	北緯 東経 40° 141' 55' 13" 41" ア	青森県教育委員会 20040601 / 20040812 野辺地町教育委員会 20041001	3, 400	一般国道279号道路 改築事業(有戸北 バイパス)に伴う事前 調査
				北緯 東経 40° 141' 55' 12" 54"	20041130		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
むかいだ 向田遺跡	散布地	縄文時代 前期 中期 後晩期	溝状土坑	1基	縄文土器(前期・中期・後 晩期)、石器(石鏃・磨製石 斧・礫石器)		縄文、平安時代の複 合遺跡。
	散布地	弥生時代			弥生土器(中期)		平安時代の竪穴住居 跡、竪穴遺構、土坑、
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 竪穴遺構 焼土 土坑 溝跡 柱穴状ピット	5軒 2基 4基 8基 3条 34基	土師器、須恵器、製塩土器、 土製品(羽口・支脚)、石器 (砥石・礫石器)、木製品 (容器)、鉄製品(刀子)、鉄 滓、炭化材、炭化種子		柱穴状ピット(掘立 柱建物跡)、溝跡(柵 列)等で構成される 集落を検出。
要 約	竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、柱穴状ピット(掘立柱建物跡)、溝跡(柵列)等で構成される平安時代の集落を検出した。竪穴住居跡の中には、一辺9m前後の大型の焼失家屋が1軒あり、炭化した建築材や木製品等が出土した。集落は、土師器、須恵器等の出土遺物から概ね10～11世紀に存続したものとみなされるが、須恵器は、すべて五所川原須恵器窯跡前田野目支群の10世紀第3四半期のものである。大型の竪穴住居跡は、当該時期に降下した白頭山起源の苫小牧火山灰及び十和田カルデラ起源の十和田a火山灰の層を切っており、他の竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑の中には、堆積土中に苫小牧火山灰を含むものがある。竪穴住居跡にはカマドの主軸方向の違いもみられ、集落は、10世紀前半以前の遺構と10世紀後半以降の遺構に分かれるようである。大型・中型の竪穴住居跡は埋没途中のもので、地表面観察では凹地となっていたが、集落が立地している丘陵の西北西～西側の尾根・緩斜面でも、竪穴住居跡とみられる凹地を確認した。集落からは、土師器、須恵器、製塩土器、土・石・木・鉄製品等の他、植物遺体や貝殻も出土しているため、本遺跡では、塩、鉄製品等が生産され、農作物、海産物(貝)等が利用されていたようである。						

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第408集

## 向田(37)遺跡

- 一般国道279号道路改築事業（有戸北バイパス）に伴う遺跡発掘調査報告-

発行年月日	平成18年3月10日
発 行	青森県教育委員会 〒030- 8540 青森市新町二丁目3- 1
編 集	青森県埋蔵文化財調査センター 〒038- 0042 青森市大字新城字天田内152- 15 TEL 017- 788- 5701 FAX 017- 788- 5702
印 刷 所	株式会社新印刷興業 〒030- 0142 青森市大字野木字野尻37- 728 TEL 017- 739- 6431 FAX 017- 762- 1804

---